

メールゼブルク司教ティートマル（二〇〇九—二〇一八年）と『年代記』

——人と作品——

三 佐川 亮宏

一 ティートマルとその世界⁽¹⁾

「かくして、汝は、私の中に卑小な人間の姿を見ることがなるであろう。頬と顔面の左側が歪んでいるのは、かつてここに瘦孔^{ろうこう}の腫れ物が現れ、未だに膨れ続けているからだ。幼少の頃に折れた鼻は、容貌を滑稽なものにしている。だが、これら全てについて、何も悲嘆したりはすまい、もし、その内面において光彩を放っているのならば。だが、私の性格は、憐れで、酷く^{ひどく}激し易く、善き方向へと御しづらく、嫉妬深い。己自身が笑いに相応しいのに、他人を嘲笑するのが好きで、道理に反して、誰一人として容赦しはしないのだ。私は、大食家にして偽善者、吝嗇^{りんしゃく}漢^{まん}にして誹謗者である。そして、以上の、当然ながら己に帰せられるべき悪徳を最後に締め括るならば、人が言う以上に、あるいは何かしら評価する以上に、下劣な人

間である」——。

『年代記』の著者ティートマル（九七五／七六年七月二五日—一〇一八年二月一日）が描き出した赤裸々な自画像である（第四卷七五章）。作品中で屢々繰り返される厳しい自己批判の言葉は、もとよりそのまま額面通りに受け取られるべきではない。ただし、理想的司教の徳たる「謙虚さ（*humilitas*）」という自己卑下の定型的表現^{ボク}を超えた、重い罪悪意識の葛藤に、彼が実際苦しみ続けていたこともまた間違いない。「ティートマルの憂鬱」——その精神的緊張関係が何に由来するのか、以下では、作品と時代背景を通じてその一端に迫ってみることにする。

【ヴァルベック伯家とシュターデ伯家

——ザクセン人貴族の世界】

一 ティートマルの父ジークフリートは、東ザクセン地方、ヘル

ムシュテット近郊のヴァルベックを拠点とするヴァルベック伯家の、母クニグンデは、エルベ川下流域地方に勢力を張るシュターデ伯家の生まれである。双方の家門の始祖は、ティートマルにとつては曾祖父に当たり、いずれもリウタールという名であった。彼らの名が初めて史料に現れるのは、九二九年である。象徴的なことに、エルベ・オーダー間の西スラヴ系民族のレダリー族との戦いで、両名ともその命を落としたのであった。家門間では常日頃から互いに競合しつつも、外敵のスラヴ人、ヴァイキングの脅威に対しては、結束して「故郷 (patria)」、すなわちザクセンの防衛に当たること、それがザクセン人貴族の責務であった。その指導的地位にあるオットー家の頭領が九一九年以来国王として、九六二年以降は皇帝として西欧世界に君臨したことは、彼らザクセン人の誇りと名誉を著しく高揚させることとなった。さらに、九六八年のマクデブルク大司教座及びメールゼブルク、マイセン、ツァイツの各司教座の創設以降は、エルベ川以東の地にキリスト教の福音を伝えることが、宗教的使命として新たに加わるようになったのである。

二 ヴァルベック伯家の後を継いだ同名の息子リウタール二世は、近隣のクヴェーアフルト伯家からマティルデを妻に迎えた。ところが、リウタールは九四一年、王弟ハインリヒによる兄オットー一世の暗殺未遂事件に加担した廉で、ノルトマルク辺境伯ベルトルトの下で一年間拘禁を余儀なくされた。娘アイラは、後にベルトルトと結婚し、バイエルンの名門パーベンベルク家との血縁関係を構築することになった。なお、ティートマルに洗礼と堅信礼を授けたハルバーシュタット司教ヒルデヴァルトの父は、この事件で斬首に処されている。リウタールは、贖罪の証としてヴァルベックの地

に修道参事会を建立し、九六四年の死に際し同院に埋葬された。

長男⁽²⁾のリウタール三世、すなわちティートマルの伯父は、九八四年の王位継承争いにおいて、上記の王弟ハインリヒの息子であるバイエルン大公ハインリヒ（喧嘩公）の側に与したと考えられる。その後、国王オットー三世と和解し、恐らくは九九五年頃、ハルデンスレーベン伯家のディートリヒの後任として、ザクセン・ノルトマルク辺境伯の地位に拔擢された⁽³⁾。本拠地を同じくする同家とヴァルベック伯家は、以後様々な局面においてライヴァルとして対峙していくことになる。さらに、九九八年に起きた粗暴な性格の長男ヴェルナーによるマイセン辺境伯エッケハルトの娘リウトガルトの誘拐事件は、皇帝オットー三世の庇護を得てテューリンゲン地方の最有力家門へと台頭したエッケハルト家との対立を深めていく原因となった。確かに、ヴェルナーは、一〇〇三年に父が死去した後、ノルトマルク辺境伯の地位を金銭を用いて獲得することに成功した。しかし、ハルデンスレーベン伯家、エッケハルト家の双方と提携したヴェッティーン家と私戦を繰り広げ、一〇〇九年にその地位を、さらに一〇一四年には命をも失い、ヴァルベック伯家の凋落を決定づけることとなった。

リウタールが新たにヴォルミールシュテットに居を構えたのに対して、ヴァルベックの地は弟のジークフリートが継承した。ジークフリートは、戦功に乏しい兄とは対照的に、九九一年に没するまで幾多の戦闘に参加した。晩年は、皇后テオファアヌに忠実に仕え続けたが、九九〇年のブランデンブルク遠征で負った怪我が原因で、翌九九一年に亡くなった。

妻クニグンデとの結婚は、九七二年六月以降である（第二巻二九

章)。彼女の父のシュターデ伯ハインリヒは、ザクセン大公ヘルマン・ビルングと共にスラヴ戦役に参加した他、オットー一世にも忠臣として信を置かれていた。妻に迎えたユーディットは、ハインリヒ一世の前任国王コンラート一世の出自するコンラート家の出で、ライン中流域地方の有力貴族にしてシュヴァーベン大公を輩出する同家との結び付きにより、シュターデ伯家の盛名は一躍高まった。また、ティートマルは言及していないものの、後妻ヒルデガルトの同名の娘は、ヘルマンの後継ザクセン大公ベルンハルト一世に嫁い(4)でおり、同じくエルベ川下流域地方を本拠地とし、それまで競合関係にあったビルング家との間に、提携関係を築き上げることに成功した。

「ザクセン」の枠組みを越えて幾重にも張り巡らされた貴族間の人的絆のネットワークは、ティートマルの高位聖職者としてのキャリアと行動半径にも大きく影響を及ぼしていくことになる。

三 ジークフリートとクニグンデの結婚は、息子五人の子宝に恵まれた。長男ハインリヒは、九九一年に父の伯領を継承し、九九八年には次男フリードリヒと共に従兄弟のヴェルナーの誘拐事件を支援した。ヴェルナーが失脚した一〇〇九年のデーディ殺害事件ではフリードリヒが協力し、落命に至った一〇一四年の誘拐事件ではハインリヒが仲介を試みている。彼はまた、一〇〇四年の国王ハインリヒ二世によるペーメン遠征とパウツェン奪還戦にも参加していた。両名の歿年は不明である。フリードリヒは、後年マクデブルクの城塞伯(5)に就いているが、その地位を継承した息子コンラートの死によって男系は途絶え、ヴァルベック伯家は断絶することになる。世俗貴族としては目立った活躍に欠ける兄二人とは異なり、聖職

者のキャリアを定められたティートマル以下の三人の弟は、いずれも司教の地位にまで昇った。ティートマルが最も愛した兄弟で、『年代記』を献呈した四男ジークフリートは、マクデブルク市外の山の上に立つ聖ヨハネス修道院(通称ベルゲ修道院)の院長を経て、ミュンスター司教に就いた。末弟ブルーノは、コルヴァイ修道士を経て、ニンブルク⁶ベルゲ修道院長、フェルデン司教の要職を歴任した。ヴァルベック伯家とコルヴァイ修道院との間には人的繋がりがあったようで、院長ティートマル(在位九八三—一〇〇一年)との血縁関係が推定されている。

なお、ジークフリートは、クニグンデとの結婚に先立ち男子を儲けていた。一〇〇九年のティートマルの司教登位に伴い、後任ヴァルベック修道参事会の院長となったヴィリギスである(5)。

【若き日のティートマル】

一 ティートマルは、九七五年(6)もしくは九七六年の七月二五日(第三卷六章)、恐らくはヴァルベックにて産声を上げた。「第二の誕生日」たる命日とは対照的に、誕生日が記録に残されることは、当時は稀有なことであった。『年代記』でも、他にはハインリヒ二世の誕生日が伝えられているのみである(7)。洗礼、そして後に堅信礼を授けたのは、ヴァルベックを管轄するハルバーシュタット司教ヒルデヴァルトであった(第四卷一八章)。九八三年頃、最初の教育を受けるため、クヴェトリンブルク女子修道参事会に滞在する父方の大叔母エムニルデの手に託された(第四卷一六章)。幼少期のティートマルは、同地にて九八四年のバイエルン大公ハインリヒの国王選出、あるいは九八六年の復活祭の宮内奉仕を目撃していたか

もしれない（二、九章）。父ジークフリートは九八七年、彼をマクデブルク市外の聖ヨハネス修道院に託した。ただし、受け入れ可能な修道士数が限られていたため、九九〇年、かつて高名な教師オリックを指導者に戴いていた司教座聖堂付属学校へと移籍させた。

当時のマクデブルク大司教は野心家のギーゼラー、すなわち皇帝オットー二世と共に九八一年にメールゼブルク司教区の解体を主導した、同地の第二代司教であった。ところが、翌九九一年には父、そして祖母マティルデが相次いで死去する。父の兄の辺境伯リウタール（三世）は、財産相続に乗じて母クニグンデが得た遺産を篡奪しようとして企てたが、これは国王の介入によって阻止された（一六、一七章）。「叔父というものは、兄弟の息子たちに厳しく臨むのが常である」（第六卷五三章）。リウタールとの確執は、その後もティートマルに重荷としてのしかかることになる。

二 マクデブルクの教師エツケハルト（赤）に対しても、ティートマルはかなり複雑な感情を抱いて筈である。九九四年、母方の三人の伯父たちがヴァイキングに襲撃され、捕虜となる事件が起きた。息子のない伯父ジークフリートは、母クニグンデに息子の一人を人質として提供するよう懇願した。母は最初、ベルゲ修道院にいる息子ジークフリートの引き渡しを求めて使者を遣わしたが、院長リクダグはこれを拒否した。使者は、次に司教座聖堂付属学校に向かったところ、エツケハルトはティートマルの引き渡しを了としたのである。「かくして、私は、木曜日同地を出立した。その際、今後は人質として海賊の元で暮らすべく、世俗の服装を纏わされたのだが、その下には従前の（「聖職者の」）衣装を身に着けたままであった」（第四卷二四章）。

幸いに伯父は、機転を利かして脱出に成功して事なきを得たのだが、当時一八歳のティートマルにとつて、かの教師の対応が、俄には腑に落ちぬものであったことは想像に難くない。やや滑稽とも言うべきその死に様の叙述に、著者の嘲笑的筆致を読み取ることは出来ないだろうか（六六章）。エツケハルトの後継教師となったのは、ゲッドーである。その下で共に学んだのが、祖母マティルデの甥に当たる、ほぼ同年齢のクヴェーアフルトのブルーノである。後年、異教徒伝道大司教に任命され、一〇〇九年、ブルス人布教に際して、一八人の仲間たちと共に壮絶な殉教死を遂げることになる。早くから情熱的信仰心に燃えた行動的なブルーノとは異なり、ティートマル自身は、伝道活動にほとんど関心を示すことはなかった。第六卷九四、九五章の詳細にして感情の込められた追悼文は、彼なりの贖罪の表現と見るべきであろう。⁽⁸⁾

三 九九七年、母クニグンデが亡くなった。遺産は兄弟間で分配され、ティートマルは、ヴァルベック修道参事会とその所領の半分を得た。時折「私の莊園」と呼んでいるロットメルスレーベン、アイズドルフ、ヘースリンゲンも、この時に併せて相続したものと推定される（第一卷一三章、第六卷三九、四二、四七章、第八卷一五章）。一〇〇〇年前後頃には、司教座聖堂参事会員に加えられ、聖職も受給することとなった。若き日を共に過ごしたマクデブルクの「私の修道兄弟 (confrater)」たちとは、その生涯を通して、記念祈禱の義務を負う精神的・宗教的な絆で結ばれ続けることになる。一〇〇二年五月には、ヴァルベック修道参事会の院長の地位を、本人が告白するように長きに亘る交渉の末、聖職売買によってようやく手に入れた。相手は、同教会の所領の残り半分を得た伯父リウ

タールであった(第六卷四三、四四章)。もつとも、私有教会の聖職を親族間での贈与によって取得することは、叙任権闘争以前のこの時代においては、広く行われていた慣行であった。院長就任は、司牧活動のためというよりは、経済的基盤の確保という意味合いが濃厚であった。ティートマル自身の帰属意識の向かう先がマクデブルク司教座聖堂参事会であることに変わりはなく、以後も引き続き同地に頻繁に滞在していたと思われる。

なお、最近年、院長時代(一〇〇二―一〇〇九年)にティートマルによつて作られた短詩Ⅱ墓碑銘が、一六一九年に刊行された史書の中から再発見された(二〇〇四年)⁹⁾。ヴァルベックの聖マリア教会内に石棺が安置された「力強く敬虔さの故に高名な伯妃」の祖母マテイルデ、「有能な」父ジークフリート、そして「生前においても墓所においてもその夫の側から片時も離れることのなかった」母クニングンデの三人を追悼した手向けの言葉である。結びでは、詩の読者に直接向けて、死者の魂の救済のための執り成しを請うた後、墓所製作の委任者が、ティートマル自身であることを伝えている。身近な家族への祈念の堅持と後世の人々への執り成しの願い――『年代記』と『メールゼブルク死者祈念の書』の重要なモチーフを、ティートマルは、司教就任以前の時期に既にこの小品において具現化していたのである。

修道参事会の墓所で想起されるのは、兄の亡くなった妻の墓所を確保するために、ティートマルが墓荒らしをした事件である(第六卷四五章)。初代院長ヴィリギスの墓を開いたことで病に罹り、彼の亡霊と自らの罪の意識に深く責め苛まれ続けているという奇譚である。この事件の贖罪のために、ティートマルは、ケルンへの巡礼

の旅に出ている。ヴァルベック伯家が、ケルンと密接な繋がりを持っていたことは確かである¹⁰⁾。父は、同地に滞在した九八三年に八年後の死を予言されていたし(第四卷一六章)、一〇〇三年一月二五日に急死した伯父リウタールの亡骸は、ケルン大聖堂に埋葬された(第六卷八六章)。ティートマルが巡礼に出たのは、この伯父の死と関連してか、あるいはむしろ一〇〇四年秋頃と推定される。トクサンドリア地方の荘司(第四卷三四章)と知り合ったのも、このケルン滞在の折であったのかもしれない。

【メールゼブルク司教ティートマル】

一 その直後の同年二月二日、ティートマルは、アルシュテットで、マクデブルク大司教ターギノによつて司祭に叙階された。臨席した国王ハインリヒからは、カズラを拝領した(第六卷四六章)。五年後、ティートマルをメールゼブルク司教へと登位させたこの二人との出会いは、同じ一〇〇四年の一月二五日まで遡る。メールゼブルク司教区の再興は、最後まで抵抗を続けた大司教ギーゼラーの死、司教座聖堂参事会の自由選出権を無視した側近ターギノの後継擁立によつて、早くも二月に実現の運びとなった(第五卷三九章以下)。

何故ティートマルが、バイエルン出身で修道院改革の推進派に属する新大司教によつて引き立てられたのか。それは、ザクセン・テューリングン地方では、よそ者であるターギノが、在地の有力貴族であるヴァルベック伯家との提携によつて、後ろ盾を得ようとしたからと考えられる¹¹⁾。ギーゼラーに厚遇されることなく、宮廷司祭等の目立ったキャリアも欠き、外見のみならず性格にもかなり癖があ

る司教座聖堂参事会員ティートマルの出世は、この時に始まった。

三月に開始された国王のイタリア遠征では、ティートマルも、ターギノに付き従ってアウクスブルクまで同行することを許された（第六卷三章）。翌一〇〇五年七月には、ドルトムントで開催された教会会議（一八章）に、やはり大司教に従って列席したと推定される。一〇〇七年夏の第三次ポーランド戦役でも、軍事指揮を託されたターギノの軍隊にその姿が見い出される（三三章）。そしてついに一〇〇九年四月、当時三三歳のティートマルが、ヴィクベルトの後継者として第四代メールゼブルク司教の地位に就くことが出来たのも、逡巡する国王に対するターギノの度重なる口添えのお陰であった（三八章以下）。それ故、ティートマルが約束の地であるアウクスブルクに三日遅れで到着した時、ターギノが立腹したのも無理からぬことであった。なお、ハインリヒは、宮廷司祭等の側近に属さないティートマルに対し、任命の条件として、司教教会に対する財産寄進を要請しているが、彼は言質を与えることを巧みに回避している（四〇章）。こうした要求は、「聖職^{モニア}買^ア」の概念がなお曖昧であった当時においては、決して珍しいことではなかった。

二 メールゼブルクは、エルベ・ザール川以東の境界域を支配するための要衝に位置する。クレモナのリウトブランド『報復の書』（九五八〜六二年成立）によれば、ハインリヒ一世は、同地に立つ王宮の二階部の壁に、九三三年の対ハンガリー戦の勝利の場面を描かせたという（第二卷三三章）。メールゼブルクは、一〇〇三年に始まり、イタリア遠征のための短期休戦を挟んで、最終的には一〇一八年のパウツェンの和約締結まで一五年間続いたポーランド戦役においても、軍隊の集結地にして解散地として機能した。

ティートマルが登位以来直面した重要な任務は、帝国司教として負う「国王奉仕 (*Servitium regis*)」の義務の履行である。メールゼブルクに頻繁に到来する国王や使節の給養・接遇、そして度重なる戦役遂行のための人的・物的負担である。ハインリヒ二世は、登位以来ザクセンの他のいかなる王宮にも増して最も頻繁に同地の王宮に滞在した¹³⁾。王妃クニグンデも、夫の西方遠征に際して屢々東方政策の代行を委託され、同地を訪れた。特に一〇一三年の聖霊降臨祭にメールゼブルクは、ポーランド大公ボレスワフ・ミェシコ二世父子、ベーメン大公オルジフが到来し、休戦協定が締結される場となった。

もつとも、ハインリヒによる東方政策の立案・遂行あるいは交渉に対するティートマルの影響力は、極めて限られていた。これは、歴代マクデブルク大司教、ハルバーシュタット司教アルヌルフ（第六卷五七章、第八卷一章）、パーダーボルン司教マインヴェルク（第六卷五七章）らと際立った対照をなす。ポーランド戦役には、時に国王に付き従って従軍しているものの、派手な活躍はない（第六卷五六、六九章、第七卷一六章）。ティートマルにとって、軍隊の先頭を切って進むミンデン司教ランヴァルト（第四卷二九章）の姿は、驚嘆以外の何者でもなかったであろう。むしろ、彼に期待されたのは、破壊された城塞レープザルやマイセンの城邑の再建工事、あるいはマイセンの輪番警護など、平時の任務であった。彼が好機と考えた一〇一六年のポーランド攻撃の機会を逸したことに關する皇后クニグンデへの批判は、自らの意見が聞き届けられないことへの苛立ちを示すものである（第七卷二九章）。一〇一八年のパウツェンの和約については、承服出来ぬせいであろうか、そもそも内容

自体を書き留めていない。『年代記』から読み取れる帝国司教としてのティートマルの姿は、行動的な政治家というよりは、むしろやや冷めた思慮深い観察者のそれに近いと言える。

三 小規模で経済的にも貧しい司教区の監督者としてのティートマルが、最も心を砕き、かつ落胆させられたのは、一〇〇四年の再興時に返還されることになかった司教区返還の試みであった。西側に隣接するハルバーシュタット司教は、一〇〇四年の再興時に、百フーフエの所領の補填と引き替えにメールゼブルクの城塞管区ブルツァクトを返還した。しかし、ザーレ川以西の司教区は引き渡す気配は全くなく、ティートマルも当初から諦めていたようである。満足のいく結果を得たのは、南側のツァイツ司教との交渉のみであった。難航したのは、恩義を受けたマクデブルク大司教、それにマイセン司教との談判である。ティートマルが『年代記』において自らの行動に最初に触れたのは、登位から三年を経た一〇一二年五月のことである。司教区返還に関する記事は、実に計八箇所にも及ぶ（第六卷六〇、六二、六九、七九、八一章、第七卷二四、五二章、第八卷二〇章）。しかし、一〇一八年に死去するまでの五年間に収めた成果は、ティートマルにとつては到底納得出来るものではなかった。確かに、ハインリヒは以後、彼の懇請に対し繰り返し善処を約束したものの、実際には各司教の利害と政治的バランスを考慮して、積極的な支援の手を差し伸べることはなかった。ターギノ、ヴァルタルトの両大司教との交渉は、具体的成果に至ることなく両者の相次ぐ死により先送りとなった。一〇一五年には、ようやくゲーロから四つの城塞管区インクワッタルトの返還を約束されたものの、一〇一七年には、皇帝の頭越しの裁定により、メールゼブルク・マイセン両司教区の境界をムル

デ川と定められ、二つをマイセンに譲渡することを余儀なくされた。翌一〇一八年には、マイセン辺境伯ヘルマンと弟エツケハルト二世との領有争いが激化し、武力衝突にまでエスカレートしている。その際、ティートマルは、剣ではなくペンで闘うことを決意するに至るのだが、この件については後程触れることとする。

四 以上の二点に対して、その成果はともかく、ティートマルは、飽くことなく精力を傾注し続けた。これに対して、司牧活動に対する彼の関心は、相当低かったと言わざるを得ない。もとより、殉教死さえ厭わなかったブラハ司教アーダルベルトやクヴェーアフルトのブルーノのような、情熱的な使命感と大胆な行動力を我々の司教に求めるのは、些か酷であろう。しかしながら、司教区内にも多数存在したスラヴ系の異教徒（ソルブ族）に対する伝道活動にさえ、彼は何ら積極的な措置を講じることはなかった。この点では、初代司教ポーゾ（第二卷三七章）、第三代ヴィクベルト（第六卷三七章）と好対照をなしている。スラヴ語には多少通じていたものの¹⁴、その知識を活用したのは、人名・地名に関する知的な語源解釈のためであつて、異教徒に向けた福音の言葉としてはなかった。ティートマルの場合、実践的な司牧者という側面よりも、あくまでも学問的関心の方が上回っているのである。（今日の歴史学にとつては極めて貴重な）ロンマツチュ地方（第一卷三章）や神殿リーデゴスト（第六卷二三章以下）における異教祭祀に関する、冷静にして詳細な叙述は、まさしくその証左である。

ティートマルの宗教的目的意識は、キリスト教を拡大することよりも、むしろその信仰心を深化させることに向けられていた。それ故、彼は、まだ神の福音の言葉に触れていない異教徒に対してより

も、一度受け入れたはずの信仰を棄てた背教徒、特にリュティチ族に対して遥かに厳しい指弾を浴びせるのである。⁽¹⁵⁾ こうした所見は、下層の民衆に対するティートマルのかなり冷徹な眼差しにも妥当する。「住民たちは、滅多に教会に通わないし、監督者を訪れることなど全く気にも留めておらぬのだ。この者たちが敬うのは、家の神々なのであって、それらがたいなる助けを授けてくれるものと期待して、生贄を捧げるのである」（第七卷六九章）。ザクセン貴族の高みに立ったエリート司教の口から、ダヴィデの言葉を知らぬ「愚か者たち」に向けた、心から共感を伴った慈悲深い言葉が発せられることはない。小さな司教区であるにも拘わらず、上記エツケハルト家兄弟との抗争の舞台になったコーレン、ロホリッツを初めて訪れたのは、実に登位一〇年目のことであった（第八卷二一章）。

「それ故、ティートマルは、前期皇帝時代のドイツにおける貴族的帝国司教の類型に属する、あらゆる長所と短所を兼ね備えた人間であったと言える——男性的、賢明にして実直で、祖国を愛し、王国への奉仕に弛まず励む、その本質において敬虔な、しかし同時に、高慢にして我が侷で、自らに託された魂の救済に心を砕くよりも、むしろその教会の表面的な利益に思いを寄せる、根本において矛盾した性格の人物であった」（シュレージンガー⁽¹⁶⁾）。司教としての真摯な責任感に満たされた彼は、それが故に尚更、現実との乖離を強く自覚し、その呵責の念と常に葛藤し続けねばならなかったのである。その自責の念に、誠実にして敬虔な信仰心とその裏返しとしての罪悪観を加えた時、初めて我々は、『年代記』中に満ち溢れる自らの魂の救済への不安、すなわち先に冒頭で引用した屈折した「自画像」の一端を理解することが出来るのである。なお、ティートマル

は、時代の趨勢である修道院改革に対して二度に亘り批判を加えているが（第六卷二〇、四一章）、こうした保守的姿勢も、上記の性格に一脈通じるところがあると言えよう。

【ティートマルの死】

一〇一八年二月一日、メールゼブルク司教は、享年四三歳で死去した。彼は、第七卷三三章で、亡き母クニグンデの言葉として、自らが死ぬのは「月曜日か木曜日」との予言を書き留めていたが、奇しくもこの日は月曜日であった。年次は、『クヴェトリンブルク編年誌』の同年の項、命日は、『メールゼブルク死者祈念の書』と『リュエネブルク死者祈念の書』に書き留められた。⁽¹⁷⁾ 亡骸は、旧メールゼブルク大聖堂内の内陣に埋葬された。彼が一〇一五年五月一八日に自ら礎石を据えた（第七卷一三章）、新大聖堂が後継司教ブルーノによって完成され、皇帝ハインリヒも列席して献堂式が執り行われたのは、三年後の一〇二一年一月一日のことである。亡骸は、前任者ポージ、ヴィクベルトのそれと共に、北側の翼廊部にまとめて移葬された。その後の一三世紀（？）に、ティートマル個人のために新たな石棺が作られ、再度移された。周囲に刻まれた碑文は、その後判読不可能になってしまったが、一七世紀に由来する記録によれば、刻印されていたのは次の銘文であった。

精神、手、言葉をもってティートマルの事績録は語りかける
義しきことを求める者が何を為し、知り、教えるべきかを

石棺に改修が施され、碑文も改めて刻印されたのは、二〇一四年の

ことである。⁽¹⁸⁾

二 『年代記』の成立過程、各稿本の伝承状況

【成立過程】

第一巻の記事中で最も新しい事件は、一三章に記述された一〇一二年一月及び一月の出来事である。ティートマルが『年代記』の執筆に勤しんだのは、司教登位から三年を経たこの一〇一二年の秋頃から、死去する一〇一八年の九月までのほぼ六年間である。⁽¹⁹⁾ 第一〜三巻の主要部分は、一〇一二年秋頃に着手され、一〇一三年夏にはほぼ完成していた。完成間際の第三巻二五章まで達した時点で、クヴェトリーンブルク女子修道参事会から、当時その執筆が進行中であつた『クヴェトリーンブルク編年誌』の写本（少なくとも七八一年〜九九八年の項までを記載）と、一〇一二・一三年に起きた事件に関する同編年誌の覚書を手した。この材料を基に、その後第一巻一九章〜二六章と第二巻三四章〜四二章を新たに増補すると同時に、一連の小さな追記を各所に自ら施した。写本の入手が当初から予定されていたことは、第九葉裏から第一三葉表の八頁を予め空白にして、補遺のために確保しておいたことから解る（Ⅱ第一巻一九章〜二六章）。第三四〜四二葉の一八頁（Ⅱ第二巻三四章〜四二章）は、新たに分冊として追加挿入された。

第四巻と五巻は、一〇一三年の後半に執筆された。その際、九九八年までの事件（第四巻八〜三〇章）については、『クヴェトリーンブルク編年誌』の利用が、もはや追記のためではなく執筆と同時並行で進められた。なお、第四巻五一三章から一五章前半までを直

筆で記した第五六葉は、後の時点で追加挿入されたものである。これに対し、五五〜七五章の包括的な補遺は、追記ではなく、五四章までの執筆終了後に直ちに継続執筆されたと考えられる。第六巻の執筆は、一〇一四年の前半で、八二〜八三章と八七〜九一章では、一〇一二・一三年に起きた事件に関する前述の『クヴェトリーンブルク編年誌』覚書が利用されている。第七巻と八巻は、一〇一四年後半から死の間際の一〇一八年の九月頃までの四年間に、事件とほぼ同時並行で進められた。第七巻七五章では、『クヴェトリーンブルク編年誌』の七八一年の項が利用されている。最後の第八巻では、「駆けめぐる報せが、私に新たな記述の材料をもたらすまでの間」（八章）、すなわち新たな事件の情報を入手するまでの間を利用して、個人的な回顧が繰り返し挿入されている。

【自筆稿とブリュッセル本】

一 『年代記』は、当時の作品としては、極めて稀有なことであるが、ティートマル自身の自筆稿が今日に伝承している（在ドレスデン・ザクセン州立図書館、Ms. Dresden R.147、四折判）。この手稿は「ヨーロッパの文学史上、最古の自筆稿に属する」ものである。⁽²⁰⁾ この僥倖のおかげで、作品の執筆経過をかなり詳細に再構成することが可能である。以下、まず編者ホルツマンの解題（一九三五年）によりつつ、当時の史料所見を紹介する。

自筆稿の筆跡分析によると、ティートマルを除き計八名の不詳の書き手たちが手稿の作成に従事していた（アルファベットで順に表示するとA〜H）。このうちAとBの両名の割合が突出して高い。手稿の一部が失われているため正確な算定は出来ないが、作品全体

のうち、Aの筆跡は約三五パーセント、Bは約三六パーセントを占める。ティートマル本人の筆跡は、同じメールゼブルクの地で成立した『ミサ典礼書』及び『メールゼブルク死者祈念の書』に残されており、『年代記』との比定が可能となる。その分析結果によれば、司教の直筆部分は、約三パーセントにすぎない。彼は、これらの書き手たちに対し、まず文言を口述し、一部は書写用の草稿を提供した（それぞれに特徴的なケアレスマスが確認されている）。その後、羊皮紙に書き留められた文章を、最終的に加筆修正したのである。ただし、時には相当量の文章を自ら筆を執って書き記している（例えば、第四卷一三—一五章）。

もともと、最後の四頁（第一九一葉裏—一九三表Ⅱ第八卷三〇—三四章）については、修正すべき箇所が少なからず存在するにも拘わらず、司教の直筆はもはや見出し出されない。「作品の最後の部分は、ティートマルによって、死の床で口述された」と推定して差し支えあるまい。ティートマルの病氣、そしてその死の結果、校訂には至らなかつたのであろう。これらの頁を書き留めた書き手Hは、それまで一度もこの仕事に携わつた経験がなかつた。恐らくは、司教のために特別の看護を託された人物だったのであろう²³。

自筆稿は、その後も司教教会に伝承されていたと推定されるが、約七〇年の時を経た一〇九一年かその後間もなく、叙任権闘争でザクセン地方における反国王派の指導者の存在であった七代後の司教ヴェルナー（在位一〇五九—九三年）によって、彼がメールゼブルク近郊のアルテンブルクに建立した聖ペーター修道院に寄贈された。その際、ヴェルナーは、自筆稿の欄外の九箇所「聖ペテロへ、司教ヴェルナー」と書き込み、また二箇所小さな修正を施した。

さらに一二世紀の前半には、同院の修道士と覚しき二人の書き手（N、V）が筆を加えている。Nは、ティートマルが欄外や行間に追記した文言を、より美麗な筆致で欄外の上部か下部に改めて書き直すとともに、ティートマルの直筆部分を削り取った。転記は、基本的に原文に忠実であるが、三箇所誤記している（第二卷一七章、第六卷五二章、第七卷四四章）。書き直し箇所は、かなり多数に及ぶ。このように、Nが原文に手を加えなかつたのに対して、Vは「挿入者（Interpolator）」であり、行間に新たに単語を書き加えている。ただし、筆跡分析の成果は、なお議論の余地を残している²⁴。

自筆稿は、一六世紀に至るまで聖ペーター修道院に所蔵されていた²⁵。一五三九年頃には、ゲオルク・シュパラティン（一四八四—一五四五年）が論争書執筆の目的で同院から借用していたことが、フィリップ・メランヒトン（一四九七—一五六〇年）の書簡から確認される。もともと、一四世紀に始まる同院の衰退に伴い、保存状態は悪化の一途を辿っていたようである。本来の二〇七葉のうち計一五葉はこの間に失われてしまい、羊皮紙の上部や端にも一部欠損が生じてしまった²⁶。一五六二年、宗教改革の波に洗われた同院は解散となり、建物は破壊された。自筆稿は、それに先立ちメールゼブルク司教教会の図書館に貸し出されていたが、『年代記』に関心をもったザクセン選帝侯アウグスト（在位一五五三—一八六年）の命で一五六三年、当時ヴェッツティーン家の歴史を執筆中のマイセンの歴史学者ゲオルク・ファブリキウス（一五一六—一七一年）の便宜に供するため貸与された。ちなみに、ファブリキウスは、この仕事のために『クヴェトリーンブルク編年誌』の写本も入手し、その写しを作成していたが、それは結果的には今日に伝存する唯一の写本

(Msc. Dresden Q133) となった。⁽²⁷⁾ 選帝侯はまた、『年代記』の刊行も望み、ヴィッテンベルク大学教授のライネルス・ライネツキウス(一五四一―一九五五年)と、後に「ザクセンの歴史学の樹立者」と評されるペトルス・アルビヌス(一五四三―一九八八年)に宛て、一五七四年(?)に送付させている。コーデクスがいつドレスデンの選帝侯の文書館に返却されたのか(一六世紀あるいは一七世紀前半?)、それは不明である。その後、約二世紀半以上の時を経て、最終的にドレスデンのザクセン王立図書館へと移管されたのは、一八三二年のことである。同図書館が設置されていたのは、ツヴィンガー宮殿向かいの日本宮殿内であった。

二 以上の自筆稿の欠落ないし欠損部分は、幸いなことに「ブリュッセル本」(在ブリュッセル・ベルギー王立図書館No.7503-7518)によってほぼ補完可能である。自筆稿は、一一二〇年頃にコルヴァイ修道院に貸し出され、同院で新たな写本が作成された。ただし、これは忠実な転記ではなく、不詳のコルヴァイ修道士は、文章表現のスタイルに全般的な改訂を施すと同時に、同院の歴史に関する長文の記事を随所に挿入した(第五卷一九章、第七卷一三章、七五章、第八卷三四章)。一二世紀半ば頃、東ザクセン地方の匿名の聖職者「アナリスタ・サクソ」が、浩瀚な『王国年代記』(初稿一一四八―五二二年、補訂稿五二二年以降成立)を、夥しい数の史料を材料に編纂・執筆する際に利用したのは、この写本である。手稿には、その後もコルヴァイ修道院において追記が書き込まれ続けたが、今日には伝わっていない。

伝存するのは、一四世紀末の筆跡で転写された「ブリュッセル本」である。その成立事情は不詳であるが、一六一二年にパーダー

ボルンのイエズス会学校に寄贈され、一七世紀後半に交換によって、アントウエルベン(アントワープ)のポランディストの図書館の所に帰した。以上の経緯は、『聖人行伝(Acta Sanctorum)』の編者として高名なダニエル・パーペプロホ(一六二八―一七一四年)が、コーデクスの第一葉に記した注記から知ることが出来る。イエズス会が解散させられた後は、同図書館の他の手稿ともども一八二七年、上記の王立図書館に移管された。

三 自筆稿は、ライネツキウスの手で一五八〇年にフランクフルトで刊本として出版された。⁽²⁸⁾ その欠落部を「ブリュッセル本」で補充した最初の刊本の出版は、一七〇七年である。編者は、かのゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ(一六四六―一七一六年)、彼に「ブリュッセル本」を貸与したのは、上記パーペプロホであった⁽²⁹⁾(ライプニッツは一七二〇年に、『クヴェトリーンブルク編年誌』の最初の刊本も出版している)。「モヌメンタ」による文献実証主義に基づく批判的校訂本は、ヨハン・マルティーン・ラツペンベルク(一八三九年)を嚆矢とし、筆跡分析に重点を置いたフリードリヒ・クルツェ(一八八九年)を経て、ローベルト・ホルツマン(一九三五年)に至る。模範的とも言える校訂本の最大の特徴は、自筆稿とブリュッセル本を左右見開き頁で並置し、両者の異同を明瞭に可視化したことにある。

その一〇年後の一九四五年二月一三―一四日、ドレスデンは、連合軍の大空襲により甚大な被害を蒙ることとなった。この時自筆稿は、日本宮殿地下の鋼鉄製の貴重書庫に緊急移管されていた。焼失の運命こそ免れたものの、約一メートルの高さの大量の水に長時間浸かり、加えてその後の混乱期の粗雑な扱いも災いして、数葉を除

きもはや判読不可能な状態になってしまった⁽³⁰⁾。その意味で、既に一九〇五年にザクセン州、「モヌメンタ」他の協力で、当時の最先端の技術を駆使したフアクシミリ版が製作されていたことは、真に不幸中の幸いであったと言えよう。今日では稀覯本に属する同書は、現在ザクセン州立図書館及び「モヌメンタ」の各HPで公開され、研究者の利用に供されている。

【各稿本の系譜関係】

以上、ホルツマンによる自筆稿と「ブリュッセル本」の稿本の系譜関係は、かなりシンプルであり、後者には、主として前者の欠を補う価値しか帰せられないことになる。しかしながら、今日では、もう一つ「オリジナル」の稿本が存在していたことがほぼ確実視されており、「ブリュッセル本」の再評価が唱えられるに至っている。

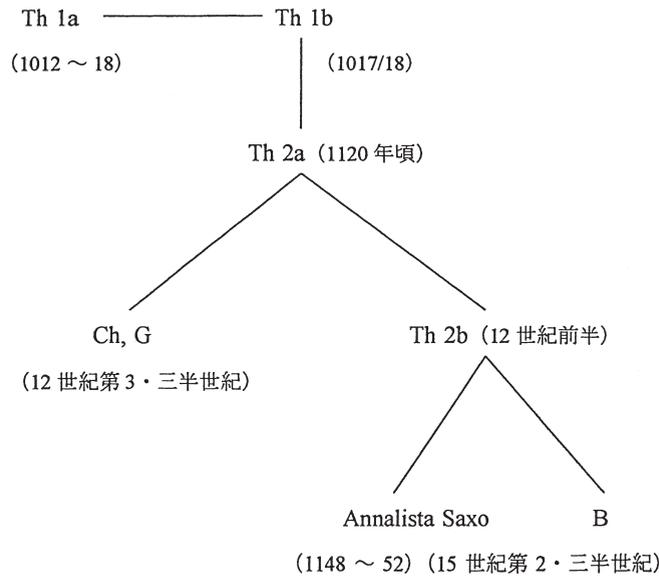
既に一九五七年、フィツカーマンは、ティートマルの癖のあるラテン語表記を、ホルツマンが古典ラテン語の規範に則して過度に校訂・修正したことを批判していた⁽³¹⁾。しかし、より根本的な修正の必要性を初めて主張したのは、ホフマンの一九九三年の鋭利なテキスト批判研究である⁽³²⁾。それによれば、「ブリュッセル本」の範本となったコルヴァイ手稿に見える文章表現のスタイルに関する改訂箇所の大半（計八一箇所）は、コルヴァイ修道士ではなく、晩年のティートマル自身の手になる可能性が高い。司教は、最晩年の一〇一七／一八年に、自筆稿の写本を作成させ、その際に上記の改訂を自ら施した。写本作成の目的は、『年代記』の被献呈者で、校閲を求めた弟の聖ヨハネス修道院長ジークフリート（第一巻序詩）に提供するためであった。一一二〇年頃に写本作成のためコルヴァイにも

たらされたのは、この改訂稿であった、というのである――。

それに先立つ一九七一年、アメリカ、バージニア州のシャーロットツピルの個人蔵書コレクションの中から、『年代記』の写本断片一葉が発見されていた⁽³³⁾。一九九四年には、テューリッゲン大学のゴータ研究図書館から、二葉の断片の発見の報が続いた⁽³⁴⁾。当時「アナリスタ・サクソ」の新社訂版を準備していたナスは、一九九六年、今や自筆稿（Th1a）、「ブリュッセル本」（B）に加え、シャーロットツピル断片（Ch）、ゴータ断片（G）の計四点を増えた『年代記』稿本・断片と、『王国年代記』のテキストを相互に厳密に比較し、次の系譜関係を再現することに成功した⁽³⁵⁾。

ティートマルの自筆改訂稿（Th1b、伝存せず）は、一一二〇年頃にコルヴァイにもたらされ、写本（Th2a、伝存せず）が作成されると同時に数々の挿入が加えられた。それは後に二系統に分枝した。シャーロットツピルとゴータの二点の断片は、一二世紀の第三・三半世紀にコルヴァイで作成された同一の写本の一部である。他方、グアナリスタ・サクソが一一四八〜五二年に用いたのは、一二世紀前半に作成されたもう一つの写本（Th2b、伝存せず）であり、「ブリュッセル本」もそこから、あるいは更なる写本を経て派生したと考えられる。メールゼブルクとコルヴァイの間の約二百キロを結ぶ媒介者となったのは、かつて聖ペーター修道院長（在位一〇九六―一一〇七年）の地位にあったコルヴァイ修道院長エルケンベルト（在位一一〇七―一一二八年）であったと推定される⁽³⁶⁾。

もとより、以上の研究をもってすべてが解明された訳ではない。「ブリュッセル本」が伝える自筆稿との相違箇所が、ティートマル（Th1b）とコルヴァイ（Th2a）のいずれに由来するかについては、



ホフマンと他の研究者の間で一部意見の相違が見られる。⁽³⁸⁾

【受容史】

「この年代記の受容の歴史は、稀有な程に僅かである。・・・人は、中世全体を通じてこの書物を唯の一度しか書写しなかった。それを読むことは稀で、利用することはほぼ皆無であった」。「この浩瀚な書物」に対する関心の低さは、「文学上の分類に適合せず、取り上げる話題が目まぐるしく変わり、形式に関するあらゆる規則を無視している」ことに起因する。⁽³⁹⁾

近年下されたこの評価は、あまりにも単純すぎるとの諷りを逃れられない。伝存手稿の数は、上述のように三点、その存在が確實視される手稿も、同じく三点を数える。さらに、もう一点が、一五一年にハレ近郊のノイヴェルク修道参事会に存在していたと推定される。⁽⁴⁰⁾

『年代記』の後半で、自身も登場するユトレヒト司教アーダルボルト（在位一〇一〇―二六年）は、ティートマルとほぼ同時期の一〇一四―二四年の間に執筆した『皇帝ハインリヒ二世伝』において、早くも『年代記』を用い、書写に近い程にその叙述に大幅に依拠していた。⁽⁴¹⁾ 同じく後半でハインリヒ二世の寵臣として頻繁に登場するマインヴェルクの伝記、『パーダーボルン司教マインヴェルク伝』（一一六五年頃成立）も、一五章で『年代記』第八卷二四―二六章を利用している。⁽⁴²⁾

『年代記』が、特に読者の関心を大いに惹いたのは、予想されるように東ザクセン地方である。一一世紀―一六世紀初頭の間に『年代記』を利用した歴史叙述作品が、少なく見積もっても一九点存在

するという事実が、そのことを如実に語っている⁽⁴³⁾。一例のみを挙げ
るならば、一二世紀半ばの「アナリスタ・サクソ」の場合、『年代
記』全四三〇章のうち実に三七四章を利用しており、それは『王国
年代記』のテキスト全体の二一パーセントを占める。この割合は、
オットー朝期後半の九六七—一〇一八年に限るならば、実に七七パ
ーセントに達する。「彼（＝ティートマル）の『年代記』は、ザクセ
ンの歴史叙述において、オットー朝期に関して最も頻繁に利用され
た史料と言える」（ナス）⁽⁴⁴⁾。

なお、第八卷一三章で言及された、メールゼブルク教会の権益・
財産を記録した「殉教者目録」は、残念ながらその後失われ伝存し
ない。ヴァルベックの院長時代の短詩が最近年再発見されたことは、
先に紹介した通りである。

三 『年代記』の主要資史料

【古典作品】

ティートマルは、「ザクセンのキケロ」（クヴェーアフルトのブル
ーノ）⁽⁴⁵⁾と呼ばれたオトリックによつて礎を築かれ、当時帝国唯一の
司教座聖堂付属学校として盛名を馳せたマクデブルクで、九九〇年
以降学問を授けられた。教師は、エッケハルト、次いでゲッドーで
あり、同門には、ブルーノの他にも後年のマイセン司教アイト、ミ
ュンスタール司教ズイトガーら⁽⁴⁶⁾がいた。その成果は、『年代記』にお
ける引用にも反映されている。

「ティートマルの引用は、相当高度な教養の証しとなる。新旧約
聖書と並んで、特にラテン語古典作品が好んで引用されている。そ

の頻度が最も高いのはウェルギリウス（二二）とホラティウス（二
〇）で、オウィディウス（三三）、ペルシウス（四四）、ルーカーヌス
（五五）も複数回引用される。少ないのは、テレンティウス（二一）、パ
ピニウス・スタティウス（二一）、マルティアリウス（二二）、ユウェナ
リス（二一）、マクロビウス（三三）、それにいわゆる『カトール語録』
（二二）である。ティートマルは、キリスト教の作品ではブルデンテ
イウス（二一）、アウグスティヌス（二二）、大教皇グレゴリウス（七）、
セヴィーリヤのイシドールス（二二）を知っていた⁽⁴⁷⁾。（括弧内
の引用回数、訳者による付加）。しかしながら、ホルツマンが列
記した利用作品の数は、その後の研究によつて特にキリスト教作品
について相当減じられることとなった⁽⁴⁸⁾。

リツペルトによれば、ブルデンティウスの唯一の箇所（第四卷四
七章）は、スタティウスに由来すると考えるべきであり、イシドー
ルスからの引用は、第一卷二四章のみである。第二卷四章の象徴と
してのYの言説は、当時広く流布しており、ペルシウスからも引用
可能である。アウグスティヌスからの二箇所（第六卷二一章、第七
卷四一章）についても、ティートマルがこの最大の教父の作品を読
んでいたことは疑問視されている⁽⁴⁹⁾。古典ラテン文学作品についても、
修辭的表現の僅かな類似を示すにすぎない作家（ペルシウス、オウ
イディウス、スタティウス、マルティアリウス、テレンティウス、ユ
ウェナリス）については、ティートマルによる精読の成果ではな
く、抜粋集等の学校での文法・修辭法の授業教材に由来する可能性
が指摘されている。なお、この他にもホルツマンは、ティートマル
による『囚人の脱出』の利用を推定していたが、今日では後世（一
〇四〇年代頃？）の成立と推定されている⁽⁵⁰⁾。

【中世の歴史書】

「私を非難せぬよう望む、もしこの書物に事実と違うことが、あるいは欠落があつたとしても、証人の数は僅かしかおらぬのだから」——第一巻序詩で自ら告白しているように、ティートマルが参看しえた中世の文献史料の数は、かなり限定されていた。第一、二巻の主たる情報源となつたのは、コルヴァイのヴィドゥキント『ザクセン人の事績』（初稿九六七／八年、献呈稿六八年、補訂稿七三年以降成立）である。他には、散発的ながら次の作品の利用が推定される。ノヴァラのステファノ（九八五年以降歿）の『聖キリアン受難伝（改訂版）』（九六〇年代成立、第一巻四章）、ルオトガー『ケルン大司教ブルーノ伝』（九六七〜六九年、第二巻二三章）、ゲーアハルト『アウクスブルク司教聖ウルリヒ伝』（九八二〜九三年頃、第一巻八章）、『王妃マティルデ伝（新編）』（二〇〇二／〇三年頃、第一巻二二章、第二巻一八章）。

さらに、第一巻〜四巻までの事件については、上述のように『クヴェトリーンブルク編年誌』が全般的に用いられている。ヴィドゥキント『ザクセン人の事績』には、一切の年次記載が欠けており、ティートマルは、事件記事のみならず正確な年次・命日等を提供する編年誌を、執筆に際して利用して供することを望んだものと思われる。彼は、少年期の一二歳（九八七年）まで、クヴェトリーンブルク女子修道参事会に滞在する父の母方の叔母エムニルデの元で養育されており（第四巻一六章）、同院の知己に対し、写本の送付をかねてより要請していたものと推定される。なお、同編年誌は、九九一年の項でエムニルデの死去について書き留めている。

一〇一三年後半に入手したのは、少なくとも七八一年〜九九八年の項までを記載した写本と、一〇一二・一三年に起きた事件に関する覚書である。同編年誌の一〇〇二年の項以前の記事の大部分は、他の諸編年誌、特に『ヒルデスハイム大編年誌 (*Annales Hildesheimenses maiores*)』（伝存せず）に依拠しており、同時代の一〇〇七年までの項も含め、一〇〇八年頃に一挙に執筆されたと推定される。一〇〇八〜一〇一五年までの項は、事件とほぼ同時並行で継続執筆された。一〇一二・一三年に起きた事件に関する覚書は、まだ完成してはいない草稿段階の記述の写しであつたと推定される。⁵¹⁾ ティートマルが利用したのは、全三十八章（ないし四一章）、計四五箇所（四六箇所）に及ぶ。⁵²⁾ 最終的には一〇三〇年まで継続された『クヴェトリーンブルク編年誌』の著者については、残念ながら今もなお不明である（男か女か、単独か複数か?）。

なお、この他にも、ハルバーシュタット司教教会の記述については、一二〇九年まで段階的に成立した『ハルバーシュタット司教事績録』の最古の部分（九九二〜九六六年成立）をティートマルが利用したとの推定がかねてより提起されてきた。⁵³⁾ しかし、その妥当性は、今日では斥けられている。⁵⁴⁾

【死者祈念の書】

『メールゼブルク死者祈念の書』は、中世の死者祈念を伝える史料の中で、疑いの余地なく最も著名な史料の一つに属する⁵⁵⁾（アルトホフ）。幸いなことに原本が、メールゼブルクの大聖堂図書館所蔵のコーデックス (*Domstiftsbibliothek Merseburg, Codex 129^r* フォリオ判) の第一葉 (表) から第八葉 (表) として今日に伝わっ

ている。ただし、本来の全一〇葉のうち最初の二葉（一月一日〜三月一六日）は失われており、伝存しているのは、三月一七日以降の命日記載のみである。編者アルトホフの包括的研究によれば、本来はシュヴァーベン地方のザンクト・ガレン修道院で作成された聖人祝日表で、ハインリヒ二世によってメールゼブルク教会に寄進された。ティートマルは、第六卷一〇二章で「黄金と象牙製の板で裝飾された福音書」に言及しているが、それは、『メールゼブルク死者祈念の書』として転用された手書本を指している可能性が高い。コーデクスの表紙（及び最初の二葉）が強引に剝ぎ取られている状況も、それが豪華本であったことを示唆している⁽⁵⁶⁾。

ティートマル個人とオットー朝家の記念祈禱を伝えるこの貴重な史料の成立は、『年代記』の執筆と一部パラレルな関係にある。すなわち、ティートマルは一〇一六／一七年頃——正確には一〇一七年五月二二日以前——、この聖人祝日表に自らの親族、マクデブルク司教座聖堂参事会の修道兄弟（*confrares*）、同僚司教、ヴァルベックの院長たちの命日をまとめて書き込ませた（第一次記載）。さらに、その数は僅かだが、新たな死者の命日の報が伝わり、その後も随時記録させた（第二次記載）。ところが、一〇一七／一八年頃——正確には一〇一七年九月一九日〜一〇一八年四月八日の間——、ハインリヒは、それまでクヴェトリンブルク女子修道参事会で管理されていたオットー朝家の構成員、帝国司教に関する命日の記録を、メールゼブルクの地へともたらした（補充部（*Ergänzungsschicht*））。それは、先行するティートマル個人の記録と合体され、ここに性格の異なる二層から構成され、七百名以上の死者の命日を記載した独自の「死者祈念の書」が成立することに

なったのである。このように本来ティートマル個人の「メモリア（*Memoria*）」の性格が濃厚な同書は、それ故一〇一八年一二月一日の司教の死去をもって、その記載に事実上終止符が打たれることになった⁽⁵⁷⁾。

この二層構成の故に、「死者祈念の書」としては異例な記載も見い出される。ティートマルの司教叙階日（四月二四日（直筆））⁽⁵⁸⁾ 『年代記』第六卷四〇章）は第一次記載、皇后アーデルハイトが九一年にイタリア国王ベレンガリオによって捕縛・解放された日（四月二〇日、八月二〇日）⁽⁵⁹⁾ 第二卷五章）、九五五年のレヒフェルトにおけるオットー一世の勝利（八月一〇日）⁽⁶⁰⁾ 第二卷一〇章）、ハインリヒ二世の誕生日（五月六日（直筆））⁽⁶¹⁾ 第六卷六〇章）は、補充部の独自の性格を反映したものである。これとは逆に、辺境伯爵ゲロー一世（九六五年歿）とその息子たちの名が欠けていることは、ゲロー家とオットー一世との対立関係を推定せしめるのである⁽⁶²⁾。

『マクデブルク死者祈念の書』と『リューネブルク死者祈念の書』についても一言しておく。前者（原本）は、マクデブルク大司教ターギノのイニシアチブで、同司教座聖堂参事会において一〇〇九年に作成された。主として聖堂参事会の歴代修道兄弟——その中にはティートマルも含まれる——とその親族、教会関係者の命日を記載している⁽⁶³⁾。

後者は、ザクセン大公家門のビルング家の家修道院であるリューネブルクの聖ミカエル修道院に由来する。一二二〇年代に作成された写本には、その後ヴェルフェン家統治下の一五世紀半ばまで、夥しい数の人名が記載され続けた。一貴族家門の「死者祈念の書」としての性格の故に、『メールゼブルク死者祈念の書』の補充部とは

対照的に、時にはオットー朝王家と鋭く対立したビルング家とその周辺の人名が多々書き留められている。⁽⁶²⁾ オットー一世期では、度重なる叛乱の指導者であったヴィヒマン二世・エクベルト兄弟（第二巻六、一二、一三章）が眼を惹く。ハインリヒ二世期になると、国王の東方政策に批判的なザクセンの親ポーランド派貴族の代表格である大公ベルンハルトと、幾重にも張り巡らされた人的ネットワーク（エッケハルト家、辺境伯ハインリヒ・フォン・シュヴァインフルト他）の拡がり、色濃く投影されている。特徴的なことに、「国家の敵」（第七巻五章）であるはずのボレスワフの命日が記載される一方、ハインリヒ・クニグンデ夫妻の名は見い出されない。ティートマルも、こうしたザクセン人貴族のポーランド戦役に對する不満を、恐らくは意図せずして『年代記』の随所で書き留めている。

【証書類、口頭の情報源】

ホルツマンによれば、他には、マクデブルク、メールゼブルク、ヴァルベックの証書が利用されている。ドルトムントの教会会議の場合、決議録がそのまま採録された（第六巻一八章）。口頭の情報源として『年代記』で確認されるのは、両親、兄弟⁽⁶³⁾、親族、数多くの友人・知己たち⁽⁶⁴⁾、あるいは頻繁にメールゼブルクに滞在したハインリヒ二世（第七巻三二章）、マクデブルク大司教ターギノ（第五巻四三章）などである。特に第四巻以降については、ティートマル自身の記憶と個人的に作成した覚書類が主要な情報源であることは言うまでもない⁽⁶⁵⁾。教会の権益・財産に関してティートマル自身が、別して「殉教者目録」に記録していたことは、先に触れた通りであ

る。

四 『年代記』の構成と主題

【構成】

ティートマルは、作品冒頭でその主題を、自らが司教として管轄する「都市メールゼブルクの歴史」と公言していた（第一巻一章）。二章では、その起源を都市建設者としてのカエサル⁽⁶⁶⁾に求めているが、しかしながら、早くも三章以下になるとザクセン大公ハインリヒ（二世）の事績を対象を拡大している（再びメールゼブルクの叙述に戻るの、一八章）。それは、最終的には、オットー朝五代（九一九〜一〇二四年）に亘る歴代国王・皇帝の歴史全般の包括的叙述という形をとるに至った。それ故、後に第一巻冒頭に付した序詩は、以上の経緯を踏まえて、その内容を「敬虔なるザクセン人の諸王たちの生涯と事績」、「我々の教会（メールゼブルク）の創設と解体、再興」及び「この教会の管轄者」の歴史と端的に表現し、作品を『年代記（*Cronica*）』と銘打ったのである。

全体は八巻から構成される。最後の第八巻のみ、「皇帝ハインリヒ二世の第二巻が始まる」との表題を付されている。もともと、他の巻についても、冒頭部に置かれた韻文形式の序詩や、本文中の明記（第一巻二八章、第三巻一、二六章、第四巻五四章）によって、歴代国王・皇帝の治世を句切りとしていることは明瞭である。すなわち、第一巻はハインリヒ一世（九一九〜三六年）、第二巻はオットー一世（九三六〜七三年）、第三巻はオットー二世（九七三〜八三年）、第四巻はオットー三世（九八三〜一〇〇二年）の治世を枠

組みとする。⁽⁶⁷⁾ ハインリヒ二世の治世（一〇〇二—一〇一八年）を、さらに国王時代二巻、皇帝時代二巻に分割している。第五巻はハインリヒの登位からメーゼルブルク司教区の再興まで（一〇〇二—一〇〇四年）、第六巻は皇帝戴冠まで（一〇〇四—一〇一四年）、第七巻は皇帝統治の初年（一〇一四—一〇一七年）、ティートマルの死によつて未完に終わった第八巻は、一〇一八年のみを対象とする。なお、章分けは編者によるものである。

叙述の対象期間と分量を比較すると、全体のバランスを失していることは明白であり、第五巻を境に前半部と後半部に二分される。後半部になると、濃厚な密度で書き留められた「同時年代記」としての性格を帯び始め、最長の第六巻は、全四三〇章中の一〇二章を占める。第七巻は、僅かに四年間の出来事を対象に、七六章、すなわち第一巻の約三分の分量を捧げている。最晩年の第八巻にまで至ると、あたかも毎日の日記に近い様相を呈するに至る。このように特に後半部では、多方面の事象に関する溢れんばかりの微細な情報が一見したところ明確な基本線なしに凝縮された形で詰め込まれている（地名表記の数を例に取るならば、第一巻では一九箇所しかないが、第六巻では一一〇箇所を数える）。率直なところ、脈絡を見失うことなく最後まで読み通すのは決して楽な作業ではない。さらに目まぐるしい話題の転換、脱線の連続、そして補遺の挿入が、作品の構成を解りづらくしているのも確かである。「修辞の飾りをもつて光り輝くこと」（第一巻序詩）は、もとより著者の関心の外にある。こうした幾多の欠点を補填するのが、時にフォルムを犠牲にしてまで叙述対象と真摯に向かい合う著者自身の、良い意味での「純朴さ（simplicitas）」であろう。折々表明される敬虔な信仰心や、

家族・友人への温かな情愛、あるいは生と死に苦悶する直接的な感情の発露に、読者は、千年の時空の隔たりを越えて時には共感、あるいはある種の感動さえ覚えるのである。

【主題】

一 前半部は、基本的に上記の二つの主題、すなわち「オットー朝の歴代国王・皇帝の歴史」と「メーゼルブルク司教教会の歴史」に収斂される。もつとも、フリード門下のシユールマイヤー「アー」による精緻なテクスト分析（二〇〇九年）によれば、そこには後半部の第五巻のハインリヒ二世の治世に接合する重要な伏線が秘められている。ティートマルは、前半部において過去の様々な事件を叙述すると同時に、歴史の経過の中に神の御業の作用を読み込み、彼独自の解釈を与えようと試みている、というのである。⁽⁶⁸⁾

オットー朝家の王位は、ハインリヒ一世に始まり、直系のオットー三代によつて継承された。その代替わりの度に王位継承を要求して蜂起を繰り返したのが、傍系のバイエルン大公家のハインリヒ一世、二世（喧嘩公）父子であり、両者間の抗争は、オットー三世の登位まで続いた。その原点到位置するのは、悪魔に唆されて泥酔した国王ハインリヒが犯した罪業である。彼が最後の晩餐の聖木曜日、妻マティルデに身籠もらせたこの赤児こそ、バイエルン大公家のハインリヒ一世に他ならない。「この赤児と将来その腰から生まれ出づる全ての者たちには、わしの伴侶よ良いか、今後争い事が絶えることは無いのだ。彼らが静穏な平和の時を享受することなど、断じて無いのだ。」（第一巻二四章）。オットー朝家の深部に宿る罪業の歴史に最終的に終止符を打ったのは、洗礼によるかの赤児の救

出が既に予示していた如く、バイエルン大公家第三代のハインリヒ二世の国王戴冠・塗油である。それは、過去に繰り返された同家の過ち——例えば、メルゼブルク司教区の解体——を正し、キリストによって導かれた政治的行動を通じて、前任者たちが犯した幾多の罪業を贖ったのであり、ここに神によって予め定められた救済史は、一つの完結を見出したのである。

この救済史的構想は、同時代史を対象とする後半部、特に第六巻以降にはもとより欠けている。確かに過去の清算は、果たされたものの、自らの生きる「現代」における神の御業の働きの具体的内実は、なおオープンであり、解釈が困難だからである。それ故、ティートマルは、溢れんばかりの情報を整序する方策として、国王の巡幸路と典礼行事（教会祝祭、入市式等）のクロノロジカルな詳述を枠組みに設定し、そこに神の御意志の顕現を探ろうと努めたのである⁽⁶⁹⁾。

訳者には、後半部における救済史的構想の後退は、逆にティートマルに自由な解釈の可能性を開く方向へと作用したのではないかと考える。彼は、ハインリヒの政策全般、特に「東方政策」を基本的には是認しつつも、神の摂理に外れると考える個別の行動、例えばメルゼブルク司教区の返還に対する曖昧な姿勢、従兄弟ヴェルナーに対する冷酷な処断、異教徒のリュティチ同盟、オボトリート族に対する宥和的対応に対しては、時に仮借ない批判を加えることが出来たのである——「主に塗油されし者も罪を犯すことがある」（第七卷八章）。

二 さらに、後半部で注目されるのは、シュールベルトが力説するように、先に紹介したティートマル個人の「メモリア (Memo-

ria)」が第三の新たな主題として前面に登場してくることである。メルゼブルク司教は、当時の他の作品には類例を見ない程頻繁に「私 (Ego)」について語る⁽⁷⁰⁾。家族に関する詳述を除けば、大半は、自らの罪深さに対する自己批判の文脈に属する。読者は、望むと望まざるとに拘わらず、ティートマルのいわば聴罪師の任を司ることを余儀なくされる——「抗わねばならぬはずの様々な誘惑に対して、それと力強く闘うのではなく、自ら進んで屈したのだ。助けるべき人々に対して、嘆かわしきことに、むしろ損害をもたらしたのだ。そして、自らの罪業を、私は、それがあたかも貴重な秘密の宝物であるかの如く、常にひた隠しにしてきたのだ」（第八卷一章）。自己、そして親族、友人、特に記念祈禱^{メモリア}の義務を負うマクデブルクの修道仲間たちの記憶を、『年代記』を通して後世に伝え、その魂の救済のための祈禱を請うことが、今や人生の後半期に踏み入った彼の主要な関心事になったのではあるまいか（因みに、最晩年に執筆した第七巻には、計四九件もの死亡記事が見い出される。「読者諸氏」に向けた度重なる懇願の呼びかけ、あるいは後継メルゼブルク司教に向けた幾多の教訓と遺言は、単なる嘆き節としてはなく、以上の「歴史叙述者」、「司教」、そして「人間の儚さ (humana fragilitas)」を知悉した「罪深きキリスト教徒」という三つの側面から理解されねばなるまい。

ところで、ティートマルが晩年に抱えていた不安な心境は、実はオットー朝の将来の運命ともパラレルな関係にある⁽⁷¹⁾。半世紀前のヴェドゥキントラの世代とは異なり、ティートマルにとってオットー朝の歴史は、もはやザクセン人の権力上昇、フランク人支配の衰退として単線的に描き得るものではなかった。ハインリヒ二世が後継

者たるべき継嗣を欠く現況は、ザクセン人にとって「終焉の始まり」の危機の到来を予感させるものであり、こうした不安要因は、彼らと王権との関係にも微妙な影を落としていた。「もし、一族の中でかかる地位に相応しき者が見い出されない場合には、かねてからの敵対視を一切排除して、少なくとも他の家門から高貴な者が〔国王に〕推戴されるべきである。何故ならば、よそ者による支配くらい不幸なことはないからである。それは、抑圧、そして自由とつての大きい脅威をもたらすものなのだ」（第一卷一九章）。

特殊ザクセン的な支配民族意識は後退し、一世紀に及ぶ五代の国王たちとの政治的協働の終焉を目前にして、ティートマルの関心はむしろザクセンの一定の自立性、「ザクセンの自由 (*libertas*)」の堅持へと移りつつあるのである。実際のところ、一〇二四年のハインリヒの死去をもってオットー朝は断絶する。そして、第七卷六二章で付随的に言及された「クローノ」、すなわちコンラート二世が、新たにフランク人王権を樹立することになるのである。

三 最後に、ティートマルの視野の地平について一言しておく。⁽⁷³⁾ 彼が叙述した空間的地平の射程は、アルプス以北はもとより、ドイツ人によるイングランド征服（第七卷三六章）、スペインから到来したイスラーム教徒とのサルデーニャ島での海戦（四五章）、そしてキエフの政変（第八卷三一章）までを捉えている。ただし、彼の視野の中心に位置し、民族的帰属感情を規定するのは、やはり「ザクセン」であった。それはまた、彼にとっての「故郷 (*heim*)」に他ならぬ。

確かに、第五卷二五、二六章におけるイタリア国王アルドウィーノとの戦闘場面の叙述で、「ドイツ人 (*Teutonici*)」という超民族

的集団の固有名辞を三例用いている。しかし、これは当時イタリアで普及し始めた他称の民族名用法をそのまま受容した結果であり、ティートマルに限らず、アルプス以北の王国を枠組みとする超民族的な共属意識は、当時なお未生であった。スラヴ語と対比されたゲルマン語系の俗語を注釈的に指称する「フオルクの言葉 (*Teutonice, Teutonici sermo*)」の三例（第一卷三章、第四卷五章、第六卷四二章）は、カロリング時代以来確認される普通辞的言語呼称の用法に属する。なお、時折表明される民族的個性に関するステレオタイプ化された情緒的発言——「よそ者への嫌悪 (*Xenophobia*)」——が向けられる矛先は、「アルプスの向こう側の人々」（第四卷四七章）、すなわちローマ人（第三卷一三章、第四卷三二章）、イタリア人（第七卷二章）、ギリシア人（第四卷一〇章）に限られない。そこには、「アルプスのこちら側」（第五卷二〇章）のロートリンゲン人（第四卷一四章、第六卷四八章、第八卷一七章）、バイエルン人（第五卷一九章）も等し並びに含まれるのである。

五 歴史の史料としての『年代記』

「読者諸氏よ、ティートマルの年代記は、好意を求めんとする」（第一巻序詩）——。司教の願い通り、『年代記』は、一九世紀以降の歴史学において、クレモナのリウトブランド『報復の書』、コルヴァイのヴィドゥキント『ザクセン人の事績』、アーダルベルト『レーギノ年代記続編』（九六六—六八年）と並んで、オットー朝期の政治史に関する四大史料の一つに数えられている。特にオットー

三世、ハインリヒ二世期に関しては、唯一無二の貴重な同時代史料としてその史料価値を高く評価されてきた。また、スラヴ系諸民族に関する詳細な叙述は、ブレーメン司教座聖堂付属学校の教師アダムの『ハンブルク大司教事績録』（一〇七二〜七五／七六年）と共に、北欧、中東欧史に関する最も古い記録の一つに属する。スラヴ世界で各種の民族史が成立するのは、ティートマルの約一世紀後のことである。一例を挙げるならば、ポーランド宮廷に滞在した「不詳のガリア人」によって著された『ポーランド人の大公・君主の年代記と事績録』（一一一四／五年頃）、プラハ司教座聖堂参事会長のコスマス（一〇四五年頃—一二二五年）が晩年に著した『ベーメン人の年代記』、そしてほぼ同時期のキエフの修道士ネストルの手になる『過ぎし年月の物語』（いわゆる『原初年代記』）がそれである。それ故、『年代記』の読み方は多種多様であろうが、以下では翻訳に際して訳注では充分に説明仕切れなかった二つの論点に絞って、概要を紹介することとする。

【ティートマルと「東方政策」】

第一次世界大戦の敗北によって、ドイツは、東方の広大な領土をポーランドに割譲することを余儀なくされた。これを承けてその後、戦間期からナチズム期に隆盛したのが「東方研究 (Ostforschung)」である。喪失した国土のドイツによる領有を歴史的に正当化しようとする様々な試みの中で、中世史において脚光を浴びたのは、東方植民史と、初期の両国間の歴史を伝える『年代記』の叙述である（なお、同じ政治的・イデオロギー的問題関心は、ポーランド側の歴史研究にも妥当する）。特に俎上に挙げられたのは、

歴代オットー朝君主とポーランド大公の支配・従属関係（第二卷二九章、第五卷一〇章）、グニエズノ大司教座創設（第四卷四五章）、それにポーランド戦役を巡る解釈である。ところが、研究者が各々の立場に即して引証した『年代記』の叙述自体が、殊この一連の問題に関しては、極めて傾向的・党派的であることが、状況をさらに複雑にしてしまった。著者のスタンスは、一語に集約される——「国家の敵たるボレスワフ」（第七卷五一章）。

一 研究者が生きる「現代」の「国民国家」間の敵対関係を、中世にストレートに投影した「ナショナル」な歴史認識と史料の恣意的解釈は、しかしながら、ルダートの画期的研究（一九七一年）が公刊されて以降根底から書き換えられつつある。例えば、ハインリヒ二世が主導したポーランド戦役は、ドイツ対ポーランドという「ナショナル」な構図ではなく、ザクセン⇨ポーランド対バイエルン⇨ベーメンという国家横断的な歴史的・人的ネットワークと地域的利害関係によって複雑に規定されていた、と理解するのが今日の通説である。また、双方の陣営の対立をエスカレートさせた要因の一つが、国王としての「名誉 (honor)」と「位階 (dignitas)」の脆弱さを力づくで糊塗せんとしたハインリヒの強権的な統治スタイル——「自らに手向かう者全てを・・・うなじを垂れて名誉を表彰するよう強いた、かのお方」（第四卷五四章）——にあったことも、政治的儀礼研究によって解明されつつある。

ザクセンの有力貴族家門の多く（エツケハルト家、ビルング家、ゲーロ家）は、ピアスト家とは縁戚関係のみならず、エルベ⇨オーデル間の西スラヴ系諸民族に対する支配という共通の既得権益で結ばれており、この戦役に対して当初から批判的であった。ティート

マルは、極力押し隠すべく努めているが、軍事動員に対するザクセン人の不満、あるいは厭戦気分は、『年代記』中でも随所に投影されている（第六卷二七、三三、五四、五六、五七、六九、七九章。第七卷一二、一八、五一、五七、五九、六〇、六四、六五章）。いづれも、戦闘遂行の意図的サボタージュないし消極的抵抗、ポーランド大公との内通、味方の裏切りに対する猜疑心、異教徒への嫌悪、和平への渴望、といった内容である。

一方、ハインリヒの側は、キリスト教伝道以来長らく提携関係にあるバイエルンとプシエミスル家の共通の利害を基軸に、独自の「バイエルン版の東方政策」（フリート）⁽⁷⁸⁾を展開していた。彼が戦役の火蓋を切る直前の一〇〇三年、異教徒のリュティチ同盟と軍事連合を締結したのも、かねてよりプシエミスル家と密接に結び付いていた同盟との連合によって、ボレスワフのペーメン大公位獲得に対抗し、失われた影響力と毀損された「名誉」を回復しようと企図したからである。国王としてよりもむしろバイエルン大公としての利益を優先したこの決断は、当然ながら教会筋からの激しい批判を惹起することとなった。その代表格であるクヴェーアフルトのブルーノ（第六卷九四、九五章）については、拙著『ドイツ史の始まり』

第九章、及び『紀元千年の皇帝』、三三三頁以下を参照されたい。

ヴァルベック伯家は、エツケハルト家、ハルデンスレーベン伯家とは積年の確執があり、テューリングゲンのヴァイマル伯家やメールゼブルク伯エジコと共にハインリヒ陣営に属していた。ティートマルも、ハインリヒのポーランドとの対決路線を基本的に承認しつつ、この傾向的・党派的観点から、事件の経過を叙述するか、あるいは意図的に沈黙した。しかし、その彼も、世俗的利益のためにキリス

ト教徒を敵に回して異教徒と手を組むことに対しては、時に小声で不満を表明せざるを得なかった（第六卷二五章、第七卷六〇、六四章他）。他方、翌一〇〇四年のメールゼブルク司教区再興が、上記の教会筋からの激しい批判をかわし支援を得るためのハインリヒの戦略的意図に基づく行動であったことや、再興の手続きに際して派遣された教皇使節が果たしたであろう相応の役割について、彼は一言も触れてはいない。⁽⁷⁹⁾

二 これとは逆に、ティートマルが二度に亘り「初代ポズナニ司教」として名を明記した「ヨルダン」なる人物（第二卷二二章、第四卷五六章）と、ポズナニ司教区とマクデブルク大司教座の関係については、その事実性がドイツとポーランドの研究者によって激しく議論されてきた。双方の主張は、ティートマルが主張するように、九六八年に既にマクデブルク大司教座の属司教区としてポーランドの地にポズナニ司教区が新たに設置され、ヨルダンが初代司教に任じられた（ドイツ）と、ヨルダンは、ポーランド全体を対象とし、教皇によって叙階された伝道司教であって、特定の司教座を有さなかった（ポーランド）、に二分される。⁽⁸⁰⁾

近年の研究動向は、後者を支持する傾向にある。九六八年のマクデブルク大司教座の創設に関する同時代史料、例えば教皇の一連の認可証書等（*PIU* 177, 190, 192）には、「ヨルダン」はもとより、「ポズナニ」の名は全く見えない。⁽⁸¹⁾ 不明確ながらもその存在が初めて言及されるのは、九九一年である。オットー三世の国王証書（*DOH* 75）はその中で、一〇〇〇年のグニエズノ大司教座の創設に際して登場するポズナニ司教（第四卷四五章）を、「ウンガー、司教にしてメモレーベン教会の修道院長」と表記した。ティートマ

ルは、第六卷第五章において、「同じ日（二〇一二年六月九日）、彼（二マクデブルク大司教ターギノ）の同僚にして属司教で、その登位から三〇年目にポズナニの教会の司牧者ウンガーが亡くなった」と述べている。仮にこの在位年が正しいとするならば、同司教座の起源を、少なくとも九八二年頃まで遡らせることが可能になる。

もつとも、さらに九六八年まで遡及するならば、「ヨルダン」、⁸²「ポズナニ」の实在を裏付ける同時代史料は、上述のように全く存在しない。オットーの証書も、「司教ウンガー」と述べているにすぎず、司教座名はもとより、マクデブルクとの関係には何も触れてはいない。マクデブルク大司教教会がグニズノの決定に初めて抗議を企図したのは、ギーゼラーが死去する直前の一〇〇三年末、すなわち国王ハインリヒとポーランド大公ボレスワフの間の敵対関係が既に公然化していた時点のことである。それは、同大司教教会宛の教皇証書を捏造するという形でなされた。そこには、ポズナニが同大司教座の属司教区であり、かつ初代司教ヨルダンは、マクデブルク初代大司教アーダルベルトによって叙階されたことが初めて明記されたのである。しかし、これは草稿段階に留まり、ついに公にされることはなかった（*PUU* 412）。

ティートマルの叙述は、まさしくこのマクデブルク大司教座側の主張の延長線上に位置する。『年代記』の著者は、第二巻執筆時の一〇一二／一三年のポーランド戦役の状況を背景としつつ、マクデブルクの立場を正当化しようと試みたのである。⁸³なお、ウンガーは、一〇〇四年に、ローマへの巡礼行に出た際にマクデブルクで拘束され、以後死去するまでの八年間、ターギノの下、同地の一修道院に留め置かれていた。マクデブルク大司教座とポーランド大公の板挟

みになつていた司教の状況について、ティートマルは頑なに沈黙を守っている。⁸⁴

【司教区返還交渉における事実の改竄】

ティートマルが司教として尽力した最大の任務は、上述のように一〇〇四年の再興時に返還されることのなかった司教区返還の試みであった。『年代記』における最初の言及は、奇しくも彼が執筆に着手したのと同じ一〇一二年の五月の記事に見い出される（第六卷六〇章）。これは果たして偶然の一致であろうか。「ティートマルは当初、その『年代記』の助けを借りて、放棄を余儀なくされたものうち幾ばくかでも救い出そうと試みた。『年代記』は、彼自身あるいはその後継者にとつて証明手段として役立ち得る、そう彼は期待したのかもしれない」（ホルツマン）⁸⁵。

第二の主題である「メールゼブルク司教教会の歴史」の隠されたモチーフである。それが意図するのは、自らと後継司教に向けて、司教区返還の交渉の記録を残すのみならず、証書と並ぶ文書的価値を『年代記』に付与することにある。このことを知らぬ読者は、著者の一見客観的な装いを帯びた記載内容を、そのまま「事実」として信じ込んでしまうであろう。実際のところ、一八九九年に『メールゼブルク司教教会証書集』を編纂したケーアは、所領・司教区に関する『年代記』の記事に証書と同等の価値を認め、該記事を通して番号を付して採録した。⁸⁶しかしながら、上記ホルツマン、特にシュレージンガー（一九六二年）の研究によって、メールゼブルク司教が二点においてペンを用いた闘い、すなわち事実の改竄を展開していたことがほぼ明らかにされている。⁸⁷

一 「ティートマルは、事実を偽ろうとする箇所て細部に踏み込む」(クラウデ)⁽⁸⁸⁾。まず、九八一年のメールゼブルク司教区の解体後、九つの城塞がマクデブルク大司教区に割譲されたとの主張について。「ギーゼラーは、自らのために九つの城塞を引き続き保持し続けた。シユコイディッツ、タウヒヤ、ヴルツェン、ピユハウ、アイレンブルク、デューベン、ポーフ、レーブニッツ、ツェケリッツがそれぞれある」(第三卷一六章)。このうちアイレンブルク以下五つの城塞は、メールゼブルク司教区からムルデ川下流域方向に大きく突出し、北のマクデブルク司教区内に食い込む地域に位置している。このため、これら五つの城塞が本来同司教区に属していたとするティートマルの記述の信憑性は疑問視されている。「ティートマルは、ムルデ川流域の城塞管区ブルツェン管区に関して、その本来の領域をマクデブルクの犠牲において拡大せんと意図したのである」(シユレージンガー)。

一〇一五年一〇月、ティートマルは、マクデブルク大司教ゲーロと交渉し、上記の九つの城塞のうち最初の四つの城塞を返還させることに成功した(第七卷二四章)。「同地で私は、彼にかつての友好的な約束を思い起こさせ、・・・次の司教区を授かった。シユコイディッツ、タウヒヤ、ピユハウ、ヴルツェン、以上四つの城塞、へ及びラースニッツと呼ばれる村。残りの五つ、すなわちアイレンブルク、ポーフ、デューベン、レーブニッツ、ツェケリッツについて、彼は判断を先送りとし、後に返還するつもりであると説明した」(傍線線部は、ティートマルの直筆部分、へは削除部分)。「及びラースニッツ」以下の二〇文字は自筆稿では削り取られているが、行間の削除部分や欄外の書き直し部分は判読可能である。そして、ホルツマンの慧眼は、削除と書き直しの過程を再構成するこ

とで、現実と願望の間を逡巡するメールゼブルク司教の心の軌跡を見事に浮き彫りにしてみせたのである。⁽⁸⁹⁾

すなわち、ティートマルは最初、書き手に対し「シユコイディッツ、タウヒヤ、ピユハウ、ヴルツェン、以上四つの城塞、及びラースニッツと呼ばれる村」まで口述筆記した。ところが、後から彼は末尾の行間に「さらにツェケリッツを」と付け加え、返還させる城塞の数を五から六へと増やしたのである。そこで良心の呵責を感じたのか、司教は、「さらにツェケリッツを」のみならずその前の「及びラースニッツと呼ばれる村」をも併せて削除した。羊皮紙に残されたのは、最初の四つの城塞のみである。その上で、ティートマルは自らを筆を執り、右側欄外に問題の五つの城塞名を新たに書き加えたのである——「残りの五つ、すなわちアイレンブルク、ポーフ、デューベン、レーブニッツ、ツェケリッツについて、彼は判断を先送りとし、後に返還するつもりであると説明した」。第三卷一六章の記事と併せて読むならば、ムルデ川下流域に突出したこれら五つの城塞は、そもそもマクデブルク司教区に属していたと考えるべきであろう。しかし、それを承知のうえでティートマルは、ゲーロとの交渉に乗じてそれらを敢えて返還対象に付け加えた(四十五)。その際、領有権主張の根拠として、『年代記』の二箇所の記事を証明手段にしようと試みているのである。

もつとも、ティートマルが獲得した成果は、長続きすることにはなかった。一〇一七年二月にマクデブルクにおいて開催された会議において、メールゼブルク司教は、獲得した城塞のうちピユハウとヴルツェンの二つを、皇帝の裁定によりマイセン司教に譲渡すること之余儀なくされたのである(第七卷五二章)。

二 次に、九七四年、オットー二世がメルゼブルク司教教会に「ザーレ川とムルデ川の間に位置し、ズイウスリとプライセの各地域にある森林」を寄進したとの主張（第三巻一章）について。ここで指示されているのは、ザーレ川以東の司教区全域、「シユコイデイツツガウ全域を包摂するであろう程の巨大な領域」（シユレージンガー）である。この並外れて広大な森林の寄進については、第八巻二〇章でも同一の主張が繰り返される。「何がこの者たち（＝マイセン辺境伯ヘルマンとエツケハルト二世兄弟）をかかると焚き付けたのか、私は真実に即して述べることにする。大司教ギーゼラーと辺境伯グンターの時代に、全ての人々に存分に気に入られるオットー二世の気前の良い好意によって、我々の教会に対して、ザーレ川とムルデ川の間に位置し、ズイウスリとプライセの各地域にある森林が授けられた。しかし、我々の座の悲しむべき破壊の後、オットー三世の治世に辺境伯エツケハルトは、ゼンメリンクと呼ばれる地の森林を獲得し、我々の森林と交換してこれを得た。だが、我々の地位の再興者たる国王ハインリヒは、それを付属物の大半共々、法的手続きによって我々に返還したのであった」。

オットー二世によるメルゼブルク司教教会への寄進については、実は九七四年八月三〇日付けの皇帝証書が二点（！）伝存している。もともと、一点（DOI 89、原本）は、寄進対象として（第三巻一章でも言及された）「ツヴェンカウの城塞とその付属物全て」と述べているにすぎない。もう一点は、『年代記』と同じく、確かに「ザーレ川とムルデ川の間にあって、ズイウスリとプライセの各地方に位置する森林」の寄進を明記している（DOI 90、原本）。しかし、実はこれは、『年代記』の著者自身が、真正証書（DOI

88）に見える寄進領域を大幅に拡大し、併せてハインリヒ二世の他の証書の書式と書体を模倣する形で後年作成した偽証書である（一）。

ツヴェンカウの城塞は、九八一年のメルゼブルク司教区の解体後、マクデブルク大司教に譲渡され、九九七年八月二〇日にゼンメリンクの森林との所領交換によってマイセン辺境伯エツケハルト一世に帰属した（DOI 352）。それは、一〇〇四年の同司教区の再興に際し、国王ハインリヒ二世によって付属の森林を加えたうえで、同司教に再び返還された（三月四日、DHI 64）。証書作成に際しては、メルゼブルク司教教会所蔵の DOI 89 が使用された。「ザーレ川とムルデ川の間に位置し、ズイウスリとプライセの各地域にある森林」については、一言も語られていない。それが初めて言及されるのは、オットー二世による寄進（九七四年）について述べた『年代記』の第三巻一章、そして上述エツケハルト一世の息子のヘルマン・エツケハルト兄弟と、メルゼブルク司教教会との間で起きた「我々の森林」をめぐる領有権争いに関連してである。『年代記』の叙述に従うならば、この争いは一〇〇五年頃の出来事となる。ティートマルが上記偽証書（DOI 90）を捏造したのは、司教登位の一〇〇九年ないし『年代記』執筆開始の一〇一二年から、一〇一七年（後述）の間と考えられる。その目的は、本来メルゼブルク司教教会に寄進されたツヴェンカウの城塞と周辺の森林領域を、シユコイデイツツガウ全域へと大きく拡大解釈することであった⁹¹。司教はまた、その偽証書の内容の信憑性を裏付けるべく、『年代記』の二箇所ですらに対応する記述を与えたのである。

一〇一七年二月、司教はこの紛争で最終的には見事に勝利を勝ち

取った。「我々の二通の証書がマクデブルクにて皇帝の御前に提示され、我々の寄進の方が万事において優先することが立証されたからである」。ティートマルが提示した証書のうち一通が、件のDOI 90の偽証書であったことに疑いの余地はない。真正証書(DOI 89)は、その後メールゼブルク司教教会内に秘匿され続けたのである。

もつとも、同じマクデブルクの会議において、前述のようにメールゼブルク司教は、マクデブルク大司教から獲得してまもない二つの城塞を、同じ皇帝の裁定によりマイセン司教、すなわちマイセン辺境伯ヘルマンらの弟アイルヴァルトに譲渡することを強いられていた(第七卷五二章)。皇帝ハインリヒは、両者の利害対立を巧みに調整し、双方痛み分けという結果に持ち込んだのであった。

三 この他にも、様々な憶測が尽きることはない。シュレージンガーは、ツァイツ司教区からメールゼブルクへの一部司教区返還を命じたDHI 65(一〇〇四年三月五日)についても、これをDHI 64に基づくティートマルの偽作と断じている。⁽⁹²⁾

国王ハインリヒが「テューリンゲンとザクセンに有する全荘園から、我々に対し各々二人の荘民を譲渡した」(第六卷一〇二章)件については、確かに一〇一〇年七月二八日付けの国王証書DHI 921が原本で伝承している。ただし、この証書は、本来印璽を欠いており、この時点では法的効力を有していなかった。後になって別の証書から取り出された印璽が転用されているが、これは当該証書発給の請願者であるティートマル本人による事後の正当化である可能性が濃厚である。⁽⁹³⁾

ハインリヒが同司教教会に「ライプツィヒ、エールシュヴィッツ、

ゴイザに立つ三つの教会を譲渡した」(第七卷六六章)件については、ゴイザの寄進についてのみ、一〇一七年一月三日付けの皇帝証書DHI 954が伝承している。前二者に関する証書は、その後失われたか、あるいはマクデブルク大司教に対する五つの城塞の過剰な返還請求と同様、そもそもティートマルによる創作である可能性が指摘されている。

【その他】

論じ残された問題は、この他にも多岐に亘る。例えば、スラヴ文献学にとって『年代記』は、スラヴ語の人名・地名学研究のための豊かな宝庫である。⁽⁹⁵⁾ 奇蹟、予言、幻視、悪魔、亡霊、あるいはシンクレティズムといったキリスト教と異教の狭間の宗教史・文化史の諸問題は、なお未開拓で、ティートマル研究では最も遅れた分野に属する。⁽⁹⁶⁾ 『年代記』には、「紀元千年の恐怖」をめぐる議論、あるいは終末論を論じるための貴重な証言も、多々見出し出される。⁽⁹⁷⁾ 今後、これらの分野での研究の進展が大いに期待されるところである。

※本稿は、平成二八〜三〇年度科学研究費補助金(基盤C「紀元千年の皇帝権とキリスト教終末論」)による研究成果の一部である。

注

(1) 本稿は、二〇二〇年度に刊行予定のティートマル『年代記』の「訳者解説」を簡略化したものである。第一、二章は、刊本の編者ホルツマンの「解題(Einleitung)」(S.VII-XLII)に依拠しており、注は、異解あるいはその後の新研究について付すこととする。

- (2) 命名法に即してリウタールを長男と見なすのが通説であるが、史料上の確たる根拠はない。シーンフリーターが長男である可能性も排除出来ない。Betina Seydenhelm, *Aus der Geschichte des Walbecker Grafengeschlechts*, in: *Tausend Jahre Kirche in Walbeck*, hg. v. Berthold Heinecke - Klaus Inghelmann, Petersberg 2007, S.12-32, hier S.17f.
- (3) Ludat, *An Elbe und Oder um das Jahr 1000*, S.25 mit Anm. 166, S.27 Anm.189, S.42, S.46, S.50f. Lübke, *Regesten*, 235, 308, 322.
- (4) Althoff, *Adels- und Königsfamilien*, S.383 (H. 33).
- (5) この他「ホルンマンは」「キーター」という名の姉妹の存在を指摘している。Holzmann, *Einführung*, S.XIV. 典拠は「メナリヌタ・サナン、一〇四九年の頃の記事であるが、ヴァルメンツ伯家の系譜に関するこの補説は、著しくクロノロジーが混乱しており信頼に値しない。Die Reichschronik des Annalista Saxo, ad a. 1049, S.391. キーターは、ホルンマンの長兄インリコの姪と推定される。Reinhard Spehr, Gräfin Oda von Walbeck. Überlegungen zur Verwandtschaft mit dem sächsischen Hochadel, in: Cottin - Merkel (Hg.), *Thietmars Welt*, S.65-71.
- (6) 最近年これを九七六年に修正する有力な意見が提起された。Carsten Hess, *Das Geburtsjahr Thietmars von Mersenburg*, in: Cottin - Merkel (Hg.), *Thietmars Welt*, S.56-63. ただし「以下での年齢記載は、通説の九七五年誕生説に基くべ。」
- (7) 一〇世紀に於いては「キーター一世が最初で、次に位置するのは『年代記』の二例である。Arno Borst, *Der überlieferte Geburtstag*, in: *Mittelalterliche Texte. Überlieferung, Befunde, Deutungen. Kolloquium der Zentraldirektion der MGH am 28./29. Juni 1996*, hg. v. Rudolf Schieffer, (MGH, Schriften, 42), Hamovver 1996, S.1-91, hier S.40f.
- (8) Markus Cottin, *Ein zeitgenössisches Lebensbild*. Brun in der Chronik Thietmars von Mersenburg, in: *Der heilige Brun von Querfurt. Eine Reise ins Mittelalter. Begleitband zur Sonderausstellung Der heilige Brun von Querfurt - Friedensstifter und Missionar in Europa 1009 - 2009*, hg. v. Landkreis Saalekreis, Querfurt 2009, S.58-63.
- (9) Christian Schuffels, *Wiederentdeckte Verse Thietmars auf die Grablage seiner Vorfahren in der Stiftskirche zu Walbeck*, in: Kunde et al. (Hg.), *Zwischen Kathedrale und Welt. 1000 Jahre Domkapitel Mersenburg*, Katalog, S.48f. 本の後「キースの伝説大坂」(今日廢藩置縣)で「聖ペーテラスの建築士の再構成の語」(ders., *Die wiederentdeckten Verse Thietmars von Mersenburg und die Grablage seiner Familie in Walbeck*, in: *Tausend Jahre Kirche in Walbeck* (注3)), S.65-83) を継いで「キースと再構成」(ders., *Wiederentdeckte Verse Thietmars von Mersenburg*, in: *DA 72*, 2016, S.71-93, hier S.88-93)。
- (10) リンタールの妻「西方の高貴な女性」(第四卷(九章)に由来する)の推測が提起された。Karl J. Leyser, *Herrschaft und Konflikte. König und Adel im ottonischen Sachsen*, (Veröffentlichungen des Max-Planck-Instituts für Geschichte, 76), Göttingen 1984, S.75 Anm.5, S.190.
- (11) Wolfgang Georgi, *Die Bischöfe der Kirchenprovinz Magdeburg zwischen Königrum und Adel im 10. und 11. Jahrhundert*, in: *Die früh- und hochmittelalterliche Bischofserhebung in europäischen Vergleich*, hg. v. Franz-Reiner Erkens, (Archiv für Kulturgeschichte, Beiheft 48), Köln-Weimar-Wien 1998, S.83-137, hier S.124ff.
- (12) Brigitte Szabó-Beckstein, *Libertas Ecclesiae. Ein Schlüsselbegriff des Investiturstreits und seine Vorgeschichte: 4-11. Jahrhundert*, (Studi Gregoriani, 12), Roma 1985, S.75. Hoffmann, *Mönchskönig und rex italicus*, S.64ff. 財産寄進が任命の主要な条件となっていたケースとしては「同」一〇〇九年に叙任されたパーター

- ボレン司教マインツェルスの事例が有名である。Hagen Keller, „Der König bat und behal“, Über die Einsetzung der Bischöfe im ottonisch-frühalsischen Reich, in: *Für Königtum und Himmebreich. 1000 Jahre Bischof Meinwerk von Paderborn*, hg. v. Christoph Stiegemann - Martin Kroker, Regensburg 2009, S.40-57, hier S.46ff.
- (21) ノンリロの同地における滞在回数二六回は、ハンズルトン（一六回）、フランクフルト（一二回）、レーゲンスルトン（一一回）をはるかに凌駕する。ティートマルの司教在位期間中の滞在は一四回を数え、そこには聖霊降臨祭（一〇〇九年、一〇一二年、一〇一三年）、復活祭（一〇一五年）も含まれる。Hofmann, *Mönchskönig und rex idiota*, S.104f. Thomas Zotz, Die Gegenwart des Königs. Zur Herrschaftspraxis Ottos III. und Heinrichs II., in: *Otto III. und Heinrich II. Eine Wende?*, hg. v. Bernd Schneidmüller - Stefan Weinfurter, (Mittelalter-Forschungen, 1), Sigmaringen 1997, S.349-382, hier S.363, S.384. Sarah Jacob - Markus Cottin, Königsaufenthalte in der Pfalz Merseburg, in: Cottin - Filip - Kunde (Hg.), *1000 Jahre Kaiserdom Merseburg*, S.112-115.
- (21) それを表面的な知識の次元に留めていたことは、Lippelt, *Thietmar von Merseburg*, S.86f. を参照。
- (21) Lippelt, *Thietmar von Merseburg*, S.121. Fraesdorff, *Der barbarische Norden*, S.234f.
- (21) Schlesinger, *Kirchengeschichte Sachsens*, Bd.1, S.89.
- (21) Siegfried Hirsch - Harry Bresslau, *Jahrbücher des Deutschen Reichs unter Heinrich II.*, Bd.3, (Jahrbücher der deutschen Geschichte), Berlin 1875, ND. Berlin 1975, S.108 mit Anm.3. Althoff, *Adels- und Königsfamilien*, S.336f. (B 174).
- (22) Klaus Krüger, Grabplatte des Bischofs Thietmar, in: Cottin - Merkel (Hg.), *Thietmars Welt*, S.364. 一〇一四年に修復された墓碑の写真については、ebd. S.22 を参照。
- (21) 詳細は、Holtzmann, *Über die Chronik Thietmars von Merseburg* を参照。
- (20) ホルツマンは、ティートマルが『ラヴェトリオンブルク編年誌』の写本を入手したのは、第三巻執筆終了時であったと考えたが、正確には執筆終了の間際であった。Giese, Einleitung, in: *Die Annales Quellinburgenses*, S.259 Anm.801, S.354-357.
- (21) この場合、最後の二七、二八章は、一八章に続けて執筆されたこととなる。しかし、両章については、一九章〜二六章の増補時に併せて執筆された可能性が指摘されている。Schulmeyer-Ahl, *Der Anfang vom Ende der Ottonen*, S.53 Anm.8, S.88 Anm.158.
- (22) Hartmut Hoffmann, Thietmar von Merseburg, Chronik, in: *Otto der Grosse, Magdeburg und Europa*, hg. v. Matthias Puhle, Bd.2, Mainz 2001, S.136-138, hier S.136.
- (23) Holtzmann, Einleitung, S. XXXV.
- (24) Ebd. S. XXXVII.
- (25) 24. Ludwig Schmidt, Zur Geschichte der Dresdner Thietmarhandschrift, in: *DA 1*, 1937, S.195f. Karl Manitius, Die Bibliothek des Petersklosters in Merseburg, in: ebd. 20, 1964, S.190-209, hier S.192 Anm.10, S.203 Anm.119 の他、次の新研究も参照。Jana Kocourek, Das Schicksal der Thietmar-Handschrift, in: Cottin - Merkel (Hg.), *Thietmars Welt*, S.148-159, hier S.149-152.
- (26) 各分冊の構成と欠損状況については、Cottin - Merkel (Hg.), *Thietmars Welt*, S.369-371 の表を参照。
- (27) Giese, Einleitung, in: *Die Annales Quellinburgenses*, S.251-255.
- (28) 以下、校訂本、翻訳の歴史についての概観は、Arno Mentzel-Reuters, Editionen und Übersetzungen der Thietmar-Chronik, in: Cottin - Merkel (Hg.), *Thietmars Welt*, S.160-169 を参照。
- (29) ホルツマンは、提供されたのは「ブリュッセル本」の写しと

- ついでに (Holzmann, Einleitung, S. XXXVII) 'これは語らば
 なる。實時期に大にトク○也。 Martina Giese, Thietmars
 Chronik. Vorlagen, handschriftliche Überlieferung und
 mittelalterliche Rezeption, in: Cottin - Merkel (Hg.), *Thietmars
 Welt*, S.72-99, hier S.78 Anm.61, ヘルマンの刊本の成立事情の
 詳細については ebd. S.78f. を参照。
- (36) これまで不明であった被害状況と無惨な言を今現在の状
 態でこのついで Kocourek, Das Schicksal der Thietmar-Hand-
 schrift (法5), S.152-158 を註釋してはるべき。本誌の原稿はこ
 のついで Cottin - Merkel (Hg.), *Thietmars Welt*, S.366-368 の表を参
 照。
- (37) Norbert Fickermann, Thietmar von Merseburg in der
 lateinischen Sprachtradition. Für eine sprachgerechtere Edition
 seiner Chronik, in: *Jahrbuch für die Geschichte Mittel- und
 Ostdeutschlands*, 6, 1957, S.21-76.
- (38) Hoffmann, *Mönchskönig und rex idiota*, S.151-176.
- (39) Marvin L. Colker, The earliest Manuscript representing the
 Korvei Revision of Thietmar's Chronicle, in: *Scriptorium*, 25,
 1971, pp.62-67. 参照。 Hartmut Hoffmann, *Bücher und Urkunden
 aus Hehnarshausen und Corvey*, (MGH Studien und Texte, 4),
 Hannover 1992, S.64.
- (40) Cornelia Hopf, *Die abendländischen Handschriften der For-
 schungs- und Landesbibliothek Gotha. Bestandsverzeichnis, 1:
 Großformatige Pergamenthandschriften Memb. I*, (Veröffentli-
 chungen der Forschungs- und Landesbibliothek Gotha, 32),
 Gotha 1994, S.84. 本誌本題の校訂箇所は以下のついで Giese, Thiet-
 mars Chronik (法8), S.89-99 の図表を参照。
- (41) Naß, *Die Reichschronik des Annalista Saxo*, S.142-178, S.429
 -437. 参照図表 S.433 'トーマス博士のトキムツ' S.434-437 の表を
 参照すべき。
- (36) ナスによれば、成立は「一四世紀末」ではなく「一五世紀の
 第一・三半世紀と推定される。 Ebd. S.144 Anm.459.
- (37) エルケンヘルムが歴史叙述に多大な関心を抱いていたことは
 中世盛期・後期のヘルマンに於いて最も広く普及するようになった
 ヘルムのエッケンホルツ(一二二六年以降歿)の『年代記』の継続
 執筆を促す「一四一六年頃に同年代記(第三系統本)参照」拙著
 『ヘルマンの始まり』(四二〇頁)を参照されたい。事実を示す
 べき。 Kassius Hallinger, *Gorze - Kluny. Studien zu den
 monastischen Lebensformen und Gegensätzen im Hochmittelalter*,
 Bd.1, (Studia Anselmiana philosophica theologica, 22-23), Roma
 1950, ND. Graz 1971, S.404f. Hans Heinrich Kaminsky, *Studien
 zur Reichsabei Corvey in der Salierzeit* (Veröffentlichungen der
 Historischen Kommission Westfalens, X: Abhandlungen zur
 Corveyer Geschichtsschreibung, 4), Köln-Graz 1972, S.109f., S.
 134f.
- (38) ヘルマンは安ホを指すこのついで Helmut Beumann, Art.
 Thietmar von Merseburg, in: *Die deutsche Literatur des
 Mittelalters. Verfasserlexikon*, 2.Aufl., Bd.9, Berlin-New York
 1995, Sp.795-801, hier Sp.797 の表を註してはるべき。ヘルマンの
 本を註し表を参照。 Naß, *Die Reichschronik des Annalista
 Saxo*, S.144 Anm.461. Giese, Einleitung, in: *Die Annales Quellin-
 burgenses*, S.266-269.
- (39) Werner Goetz, Bischof Thietmar von Merseburg, Geschichts-
 schreiber, in: ders., *Lebensbilder aus dem Mittelalter. Die Zeit der
 Ottonen, Salier und Staufer*, 2., überarbeitete und erw. Aufl.,
 Darmstadt 1998, S.106-117, hier S.116f.
- (40) Naß, *Die Reichschronik des Annalista Saxo*, S.174, S.252f.
- (41) Markus Schütz, Adalbold von Utrecht: Vita Heinrici II.
 imperatoris. Übersetzung und Einleitung, in: *Bericht des Histori-*

事会で養育されていた国王コンラート二世の娘ヘアトリクス（一〇三六年）である。

- (98) 直筆は、 Hofmann によれば三箇所確認される。ティートマルの司教叙階日、ハインリヒ二世の誕生日（後出）、及びターギンの命日（六月九日＝第六卷六一章）。 Hartmut Hoffmann, *Buchkunst und Königtum im ottonischen und frühstilschen Reich*, Textband, (MGH, Schriften, 30-1), Stuttgart 1986, S.386. Ders., *Sakramentar mit Kalender*, in: *Otto der Grosse, Magdeburg und Europa* (注22), Bd.2, S.387-389, hier S.387, *マダビ*、*母クニズン*（七月一三日＝第四卷三十八章）、*祖母マテール*（十二月三日＝第四卷一七章）の命日の記載も、ティートマルの直筆でもある可能性が指摘される。 Hans Jakob Schuffels - Christian Schuffels, *Thietmars Autograph*. Zur Eigenhändigkeit des Eintrags im Sakramentar der Mersburger Domkirche, in: Cortin - Merkel (Hg.), *Thietmars Welt*, S.100-113, hier S.111 Anm.79, 同「*ローテクス*に合本された「*マ*」サ典礼書」の第三八葉（表）の「*トニニマル*」に見える「神の聖職者たちよ、汝の同僚仲間のティートマル、すなわちそれに値せぬ罪人のことを〔祈禱におごつ〕、想ひ起つて欲し」という個人的内容を書き込み（*Die Totenbücher von Mersburg*, S.26）もティートマルの直筆である。これを疑問視する見解（Wollasch - Althoff, Einleitung, in: ebd. S.XIII mit Anm. 28, S.XX Anm.4）は、今日では斥けられる。 Schuffels, *Thietmars Autograph*, S.106ff.
- (99) 参照 Althoff, *Adels- und Königsfamilien*, S.87ff.
- (99) Althoff, Einleitung, in: *Die Totenbücher von Mersburg*, S. XXVIII-XXXVII.
- (99) もっとも、最近年の研究では、メールゼブルクで作成された『メールゼブルク死者祈念の書』に先立ちティートマルにより直接利用された可能性が憶測されている。 Carsten Hess, *Sakramentar mit vorangehendem Kalender*. Bibliothèque royale de Belgique

in: Brüssel (MS. 1814-16), in: Cortin - Merkel (Hg.), *Thietmars Welt*, S.380-384.

- (99) Althoff, *Adels- und Königsfamilien*, S.64-127 の詳細な分析を参照。
- (99) 弟ブルーノ（第四卷七〇章）、兄ハインリヒ（第七卷一五章）。
- (99) アヴィーロ（第三卷一八章）、マインスヴィント（第四卷一〇章）、アムルレート（第六卷七六章）、トクサンドリヤ地方の荘司（第四卷三四章）、等々。
- (99) ただし、『メールゼブルク司教年代記』（一一二七～一三六〇三年成立）の四章に見える „*habebat ebdonadarian saae canonice in Magdeburg vicem sic annotatam* [...]“ (*Chronica episcoporum ecclesiae Mersburgensis*, hg. v. Roger Wilmanns, in: MGH SS X, Hannover 1852, S.157-212, hier cap.4, S.174) の一節は、ティートマルがメクデブルク司教座聖堂参事会員時代に毎週覚書を書き留めていたと解られたが（Holtzmann, Einleitung, S. XXXVIII, S. XXXD）、正しくは「ティートマルが司教登位後」毎週交替の職務者の任を、覚書に即して謙虚に記していた、この意である。 Lippelt, *Thietmar von Mersburg*, S.202. Beumann, Art. *Thietmar von Mersburg* (注28), Sp.796.
- (99) 都市建設者としてのカエサルについては、既にヴィドゥキントがフーレン近郊のユーリエの創建に關連して言及していた。『サクセン人の事績』第二卷一章（拙訳一〇二頁）。サクセン地方に關しては、『都市マクデブルクと大司教座の起源』（一〇〇四年以前成立）が、その起源をやはりカエサルに求めた。 *Exordium civitatis Magdeburgensis et archiepiscopatus*, hg. v. Wilhelm Schunn, in: MGH SS XIV, Hannover 1883, S.376-384, hier cap.2, S.377. 参照 Beumann, *Theotonum nova metropolis*, S.215f. 拙著『*ゾイツ史の始まり*』三八四頁。なお、ティートマルは、執筆開始直前の一〇二二年一月に城塞レープザルの再建工事に携わった出来事の叙述（第六卷五九章）において、ルーカーヌスの名を引

きつつ、カエサルによるデュッラキウム要塞の建築に言及している。私見ではあるが、都市メールゼブルクの起源論、あるいはそもそも『年代記』執筆の契機は、失われた司教区の返還要求と並んで、『パルサリア』の叙述が与えたインセンティブに由来するのかもしれない。

(67) 第四巻のみ序詩が欠如している。その理由については、先行するオットー二世の晩年に始まった混乱の時代と神の罰（第三巻序詩）が、統治者の交代を越えてなお存続しているとのティートマルの理解に起因する、との指摘がなされている。Körntgen, *Königsherrschaft und Gottes Gnade*, S.130.

(68) Schulmeyer-Ahl, *Der Anfang von Ende der Ottonen*, S.80ff.

(69) 例えば、第七巻四〜八章（ヴェルナーによる誘拐事件）と九〜一三章（ホレスワフの召喚）の二つの記事は、これまで単なるクロノロジーの混乱と見なされてきた。しかし、「時間」（一〇一五年の復活祭）と「空間」（メールゼブルク）におおむね見事な一点に収斂して、その留意された。Schulmeyer-Ahl, *Der Anfang von Ende der Ottonen*, S.111ff.

(70) Ernst Schubert, Die Chronik Thietmars von Merseburg, in: *Bernward von Hildesheim und das Zeitalter der Ottonen. Katalog der Ausstellung Hildesheim 1993*, hg. v. Michael Brandt - Arne Eggebrecht, Bd.2, Hildesheim-Mainz 1993, S.239-241.

(71) さしあたり、ゲッツ（Goetz）の諸論稿を参照。著名な哲学者による自伝文学としての精神史的観点からの研究もある。Georg Misch, *Geschichte der Autobiographie*, Bd.2: Das Mittelalter: Die Frühzeit, 2. Hälfte, Frankfurt a. M. 1955, ND. 1992, S.500-518.

(72) Schulmeyer-Ahl, *Der Anfang von Ende der Ottonen*, S. 35ff., S.365-372. Karl Ubl, *Der kinderlose König. Ein Testfall für die Ausdifferenzierung des Politischen im 11. Jahrhundert*, in: *Historische Zeitschrift*, 292, 2011, S.323-363, hier S.338ff. 拙著『ドイツ史の始まり』一七五頁。

(73) 以下、詳細については、クヴェーアフルトのブルーノの語法と対比しつつ考察した拙著『ドイツ史の始まり』二七三—二七五、二八九頁を参照されたい。

(74) 一例として「東方研究」のプロモーターによる、ホルツマンの刊本に対する書評論文のみを挙げておく。Albert Brackmann, *Widukinds von Korvei Sachsengeschichte und die Chronik des Thietmar von Merseburg in neuer Ausgabe und die letzten Forschungen über ihren Quellenwert*, in: *Deutsches Archiv für Landes- und Volksforschung*, 5, 1941, S.162-174. 中世史学における「東方研究」については、Gerd Althoff, *Die Beurteilung der mittelalterlichen Ostpolitik als Paradigma für zeitgebundene Geschichtsbewertung*, in: *Die Deutschen und ihr Mittelalter. Themen und Funktionen moderner Geschichtsbilder vom Mittelalter*, hg. v. dems., Darmstadt 1992, S.147-164, S.210-217. ニヒリスム問題については、*Polen und Deutschland vor 1000 Jahren. Die Berliner Tagung über den „Akt von Gnesen“*, hg. v. Michael Borgolte, (Europa im Mittelalter, 5), Berlin 2002, 所収の関連論稿を参照。

(75) Ludat, *An Elbe und Oder um das Jahr 1000*. 本記書と樂の返り響ちた「史料要録」をまとめたリトバント（Lübke, *Regesten*）は、その門下生とあり、今日の研究をリードする存在と見做す。ポーランド人の研究では——訳文に多々問題があるが——Andrzej Pleszczyński, *The Birth of a Stereotype. Polish Rulers and their Country in German Writings, c. 1000 A.D.*, (East Central and Eastern Europe in the Middle Ages, 450-1450, 15), Leiden 2011. 参考とす。

(76) Gerd Althoff, Otto III. und Heinrich II. in Konflikten, in: *Otto III. und Heinrich II.* (邦訳), S.77-94. Knut Görich, *Eine Wende im Osten. Heinrich II. und Boleslaw Chrobry*, in: ebd., S.95-167, hier S.142ff.

- (77) Holtzmann, Bistum Merseburg, S.74 Anm.92. Ludat, *An Elbe und Oder um das Jahr 1000*, S.81f.:「ホーランド大公に対するハインリヒの戦役の遂行が、主要な負担を担わねばならないザクセン人貴族にたいして、既に一〇一三年以前の最初の段階において、いかに多大な嫌気と無関心を伴うものであったか、このことはかねてより研究者の耳目を惹くところであった」。
- (78) Johannes Fried, *Der Weg in die Geschichte. Die Ursprünge Deutschlands bis 1024*, (Propyläen Geschichte Deutschlands, 1), Berlin 1994. Neuausgabe: *Die Anfänge der Deutschen. Der Weg in die Geschichte*, Berlin 2015, S.681.
- (79) Holtzmann, Bistum Merseburg, S.71-75.
- (80) Lübke, *Regesten*, 152.
- (81) Paul F. Kehr, *Das Erzbistum Magdeburg und die erste Organisation der christlichen Kirche in Polen*, (Abh. d. Preuß. Akad. d. Wiss., phil.-hist. Kl., 1920-1), Berlin 1920, (ND. in: ders., *Ausgewählte Schriften*, hg. v. Rudolf Hiestand, Teil 2, (Abh. d. Akad. d. Wiss. zu Göttingen, philol.-hist. Kl., 3-250), Göttingen 2005, S.1100-1166) (トローエン博士著、S.26-29). Fried, *Otto III. und Boleslaw Chrobry*, S.109 Anm.209, S.153-156.
- (82) Lübke, *Regesten*, 265.
- (83) 年次は Böhmer, *Regesta Imperii*, II: Sächsisches Haus, Abt. 5: Papstregesten 911-1024, bearb. v. Harald Zimmermann, 2. Aufl., Wien-Köln-Weimar 1998, 738 に掲げた。Lübke, *Regesten*, 314b. 最新研究は、ホイメンの未完に終わった遺稿である。Beumann, *Theotimum nova metropolis*, S.1-6, S.120-138, S.166-169. 同書では、ハインリヒ二世によるメーゼルブルク司教区再興計画との関連で一〇一四年初頭、マクデブルク司教座聖堂参事会員で宮廷司祭のエーリヒ(後年のハーフェルブルク司教、第六卷三七章)の関与の下に作成されたと推定されている。PUJ 412 とティートマルの関係は扱われることなく終わったが(S.3 Anm.
- 10)「司教座聖堂参事会員としてギーゼラー・ターギノの両大司教に仕えたメーゼルブルク司教が、「ボズナニ問題」について同証書と同じ主張を抱いていたことは確かであろう。Kehr, *Das Erzbistum Magdeburg* (注8), S.63:「それが、九六八年の事件に関するティートマルの叙述に影響を及ぼしていないとするならば、不可思議でならぬ」。
- (84) この事件の解釈は、双方の立場に即して「保護」あるいは「監禁」や大々々異なる。Althoff, *Adels- und Königfamilien*, S. 304 (B.55), Lübke, *Regesten*, 383a, 445.
- (85) Holtzmann, Bistum Merseburg, S.70. フォンナーは、具体的に同二〇一二年の一〇月の国王ハインリヒとの返還請求交渉(第六卷八一章)の失敗に、執筆の直接的動機を求めている。Huschner, *Echt, gefälscht, oder verloren?*, S.141-143, S.145. 同月一七日、国王がメーゼルブルクでティートマルの請願に応じた同司教教会宛証書を発給したが(DHII 250)「司教が期待した新たな寄進は見送られた。ティートマルが『年代記』の執筆を開始したのは、上述の二つの同年秋頃の出来事である」。
- (86) *Urkundenbuch des Hochstifts Merseburg*, Teil 1, 19-21, 37, 43-44, 47-48.
- (87) Holtzmann, Bistum Merseburg, S.69-71. Schlesinger, *Kirchengeschichte Sachsens*, Bd.1, S.42f., S.50f., S.82, S.304f., S.307, S.309 (引用文は S.43, S.82). 次の詳説を参照。Lippelt, *Thietmar von Merseburg*, S.89-115. Huschner, *Echt, gefälscht, oder verloren?*, S.134-136, S.143.
- (88) Dietrich Claude, *Geschichte des Erzbistums Magdeburg bis in das 12. Jahrhundert*, Teil 1, (Mitteldeutsche Forschungen, 67), Köln-Wien 1972, S.107.
- (89) Holtzmann, Bistum Merseburg, S.69f.
- (90) 参考までに、一二世紀末までにメーゼルブルクの教会の森林内で建設された村落の数は、一二五を数えるとの所見がある。

- Lippelt, *Thietmar von Merseburg*, S.95 Anm.33.
- (15) 邦文の複製の型 Harald Winkel, Gefälschtes Diplom auf Kaiser Otto II. für Merseburg, in: Kunde et al. (Hg.), *Zwischen Kathedrale und Welt. 1000 Jahre Domkapitel Merseburg*, Katalog, S.52-54 参考。
- (16) Schlesinger, *Kirchengeschichte Sachsens*, Bd.1, S.307f. 参考。Lippelt, *Thietmar von Merseburg*, S.105f. Thomas Ludwig, Urkunde König Heinrichs II. für das wiederbegründete Bistum Merseburg, in: Kunde et al. (Hg.), *Zwischen Kathedrale und Welt. 1000 Jahre Domkapitel Merseburg*, Katalog, S.37f., hier S.38. Huschner, *Echt, gefälscht, oder verloren ?*, S.139f.
- (17) Huschner, *Echt, gefälscht, oder verloren ?*, S.141. Lisa Merkel, König Heinrich II. schenkt dem Merseburger Bischof Thietmar Familien von allen Königshöfen in Sachsen und Thüringen, in: Cottin - Merkel (Hg.), *Thietmars Welt*, S.354.
- (18) Huschner, *Echt, gefälscht, oder verloren ?*, S.143f.
- (19) 一風ヨリハ、Kartheinz Hengst, Thietmar als Sprachkundiger und Interpret von Orts- und Personennamen, in: Cottin - Merkel (Hg.), *Thietmars Welt*, S.306-323 参考。
- (20) 一例ヨリハ、シヤハン・ノロー・ン・ノミ・シム、小林直子訳『中世の幽霊——西欧社会における生者と死者』みすず書房 二〇一〇年、五〇—五四頁（原著一九九四年）。Schlesinger, *Kirchengeschichte Sachsens*, Bd.1, S.215-238, bes. S.226ff. Johannes Fried, *Ritual und Vernunft. Traum und Pendel des Thietmar von Merseburg*, in: *Das Jahrtausend im Spiegel der Jahrhunderten*, hg. v. Lothar Gall, Berlin 1999, S.15-63. Sébastien Rossignol, Die Spukgeschichten Thietmars von Merseburg: Überlegungen zur Vorstellungswelt und zur Arbeitsweise eines Chronisten aus dem 11. Jahrhundert, in: *Conciliium medi aevi*, 9, 2006, S.47-76. Miriam Krögg, „Wie den Lebenden der Tag, so gehört die Nacht
- den Toten.“ *Der Wandel des Jenseits und die Wiederkehr der Toten am Übergang vom frühen zum hohen Mittelalter im Licht der Chronik Thietmars von Merseburg*, Diplom Arbeit Universität Innsbruck 2015. Klaus Krüger, Thietmar, Tod und Teufel. Zu Glaubensvorstellungen im Kontext von Tod und Jenseits bei Thietmar von Merseburg, in: Cottin - Merkel (Hg.), *Thietmars Welt*, S.244-263.
- (21) 拙著『紀元千年の皇帝』第八章「紀元千年」と終末論」を参考。

- Thietmars Chronik, in: Cottin - Merkel (Hg.), *Thietmars Welt*, S.130-147.
- Körntgen, Ludger, *Königsherrschaft und Gottes Gnade. Zu Kontext und Funktion sakraler Vorstellungen in Historiographie und Bildzeugnissen der ottonisch-frühsalischen Zeit*, (Orbis mediaevalis, 2), Berlin 2001.
- Kunde, Holger et al. (Hg.), *Zwischen Kathedrale und Welt. 1000 Jahre Domkapitel Merseburg, Katalog / Aufsätze*, (Schriftenreihe der Vereinigten Domstifter zu Merseburg und Naumburg und des Kollegiatstifts Zeitz, 1/2), Petersberg 2004/2005.
- Lippelt, Helmut, *Thietmar von Merseburg, Reichsbischof und Chronist*, (Mitteldeutsche Forschungen, 72), Köln-Wien 1973.
- Lübke, Christian, *Regesten zur Geschichte der Slaven an Elbe und Oder (vom Jahr 900 an)*, 5 Teile, (Giessener Abhandlungen zur Agrar- und Wirtschaftsforschung des europäischen Ostens, 131, 133, 134, 152, 157), Berlin 1984-88.
- Ludat, Herbert, *An Elbe und Oder um das Jahr 1000. Skizzen zur Politik des Ottonenreiches und der slavischen Mächte in Mitteleuropa*, Köln-Wien 1971, Weimar-Köln-Wien 1995².
- Naß, Klaus, *Die Reichschronik des Annalista Saxo und die sächsische Geschichtsschreibung im 12. Jahrhundert*, (MGH Schriften, 41), Hannover 1996.
- Schlesinger, Walter, *Kirchengeschichte Sachsens im Mittelalter*, 2 Bde., (Mitteldeutsche Forschungen, 27), Köln-Graz 1962.
- Schulmeyer-Ahl, Kerstin, *Der Anfang vom Ende der Ottonen. Konstitutionsbedingungen historiographischer Nachrichten in der Chronik Thietmars von Merseburg*, (Millennium-Studien, 26), Berlin-New York 2009.
- 早川良弥 「„Merseburger Totenbuch“ について」, 『梅花女子大学文学部紀要』(人文・社会・自然科学編) 14号, 1977年, 43-78頁.
- 三佐川亮宏 『ドイツ史の始まり——中世ローマ帝国とドイツ人のエトノス生成』創文社 2013年.
——『紀元千年の皇帝——オットー三世とその時代』(刀水歴史全書, 95), 刀水書房 2018年.

- Akad. d. Wiss., phil.-hist. Kl., 174, 177, 198), Wien 1984/85/89. Bd.1-2, 2.Aufl., 1988.
Die Totenbücher von Merseburg, Magdeburg und Lüneburg, hg. v. Gerd Althoff – Joachim Wollasch, (MGH Libri memoriales et Necrologia, NS. 2), Hannover 1983.
Urkundenbuch des Hochstifts Merseburg, Teil 1, bearb. v. Paul Kehr, (Geschichtsquellen der Provinz Sachsen und angrenzender Gebiete, 36), Halle 1899.
 コルヴァイのヴィドゥキント, 三佐川亮宏訳『ザクセン人の事績』知泉書館 2017年。

【主要参考文献】

- Althoff, Gerd, *Adels- und Königsfamilien im Spiegel ihrer Memorialüberlieferung. Studien zum Totengedenken der Billunger und Ottonen*, (Münstersche Mittelalter-Schriften, 47), München 1984.
 Beumann, Helmut, *Theutonium nova metropolis. Studien zur Geschichte des Erzbistums Magdeburg in ottonischer Zeit*, hg. v. Jutta Krimm-Beumann, (Quellen und Forschungen zur Geschichte Sachsen-Anhalts, 1), Köln-Weimar-Wien 2000.
 Cottin, Markus – Filip, Václav Vok – Kunde, Holger (Hg.), *1000 Jahre Kaiserdom Merseburg*, (Schriftenreihe der Vereinigten Domstifter zu Merseburg und Naumburg und des Kollegiatstifts Zeitz, 9), Petersberg 2015.
 Cottin, Markus – Merkel, Lisa (Hg.), *Thietmars Welt. Ein Merseburger Bischof schreibt Geschichte*, (Schriftenreihe der Vereinigten Domstifter zu Merseburg und Naumburg und des Kollegiatstifts Zeitz, 11), Petersberg 2018.
 Fraesdorff, David, *Der barbarische Norden. Vorstellungen und Fremdkategorien bei Rimbert, Thietmar von Merseburg, Adam von Bremen und Helmold von Bosau*, (Orbis mediaevalis, 5), Berlin 2005.
 Fried, Johannes, *Otto III. und Boleslaw Chrobry. Das Widmungsbild des Aachener Evangeliiars, der „Akt von Gnesen“ und das frühe polnische und ungarische Königtum. Eine Bildanalyse und ihre historischen Folgen*, (Frankfurter Historische Abhandlungen, 30), Stuttgart 1989, 2001².
 Goetz, Hans-Werner, Die Chronik Thietmars von Merseburg als Ego-Dokument: ein Bischof mit gespaltenem Selbstverständnis, in: *Ego Trouble. Authors and Their Identities in the Early Middle Ages*, hg. v. R. Corradini et al., (Forschungen zur Geschichte des Mittelalters, 15 = Denkschriften d. Österr. Akad. d. Wiss., phil.-hist. Kl., 385), Wien 2010, S.259-270.
 — Die Slawen in der Wahrnehmung Thietmars von Merseburg zu Beginn des 11. Jahrhunderts, in: *Letopis*, 62, 2015, S.103-118
 — Thietmar von Merseburg. Ansichten und Absichten eines zeitgenössischen Chronisten, in: *Herrschaftslandschaft im Umbruch. 1000 Jahre Merseburger Dom*, hg. v. Andreas Ranft – Wolfgang Schenkluhn, (More Romano, 6), Regensburg 2017, S.139-166.
 Hoffmann, Hartmut, *Mönchskönig und rex idiota. Studien zur Kirchenpolitik Heinrichs II. und Konrads II.*, (MGH, Studien und Texte, 8), Hannover 1993.
 Holtzmann, Robert, Die Aufhebung und Wiederherstellung des Bistums Merseburg. Ein Beitrag zur Kritik Thietmars, in: *Sachsen und Anhalt 2*, 1926, S.35-75, ND. in: ders., *Aufsätze zur deutschen Geschichte im Mittelberaum*, hg. v. Albrecht Timm, Darmstadt 1962, S.86-126.
 — Über die Chronik Thietmars von Merseburg, in: *Neues Archiv der Gesellschaft für ältere deutsche Geschichtskunde*, 50., 1935, S.159-209.
 Huschner, Wolfgang, Echt, gefälscht, oder verloren ? Die Verzeichnung von Urkunden in

参考文献

略表記：DA : *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters*.

MGH : Monumenta Germaniae Historica. <<http://www.dmgh.de/>> SS : Scriptorum

※極めて詳細な文献目録が、Cottin - Merkel (Hg.), *Thietmars Welt*, S.498-526 に収録されている。

【ファクシミリ版 (自筆稿)】

Die Dresdner Handschrift der Chronik des Bischofs Thietmar von Merseburg. Mit Unterstützung der Generaldirektion der Kgl. Sächs. Sammlungen für Kunst und Wissenschaft, der König-Johann-Stiftung und der Zentralkommission der Monumenta Germaniae historica in Faksimile, hg. v. Ludwig Schmidt, 2 Teile, Dresden 1905.

<<http://digital.slub-dresden.de/werkansicht/dlf/122703/1/>>

<<http://www.mgh-bibliothek.de/digilib/thietmar.html>>

【校訂本】

Thietmar von Merseburg: *Die Chronik des Bischofs Thietmar von Merseburg und ihre Korveyer Überarbeitung*, hg. v. Robert Holtzmann, (MGH Scriptorum rerum Germanicarum, NS. 9), Berlin 1935.

【翻訳書】

Laurent, Johann C. M., *Die Chronik des Thietmar von Merseburg*, (Geschichtschreiber der deutschen Vorzeit, zweite Gesamtausgabe, 39), 4.Aufl., neuübertragen und bearbeitet v. Robert Holtzmann, Leipzig 1939, ND. mit Illustrationen von Klaus F. Messerschmidt, Halle 2007.

Trillmich, Werner, *Thietmar von Merseburg. Chronik*, (Ausgewählte Quellen zur deutschen Geschichte des Mittelalters, 9), Darmstadt 1957, 8 Aufl., mit einem Nachtrag v. Steffen Patzold, 2002.

Warner, David A., *Ottoman Germany. The Chronicon of Thietmar of Merseburg*, (Manchester Medieval Sources Series), Manchester - New York 2001.

Tock, Benoît-Michel, Thietmar de Mersebourg, Chronique, in: *Rois, reines et évêques. L'Allemagne aux Xe et XIe siècles*, sous la direction de Cédric Giraud et Benoît-Michel Tock, (Témoins de Notre Histoire, 13), Turnhout 2009, pp.113-170 (第3・4巻のみ).

※この他、ポーランド語 (1953年)、チェコ語 (2008年) の翻訳が刊行されている。

【主要関連史料】

Die Annales Quedlinburgenses, hg. v. Martina Giese, (MGH Scriptorum rerum Germanicarum, 77), Hannover 2004.

Die Reichschronik des Annalista Saxo, hg. v. Klaus Nass, (MGH SS XXXVII), Hannover 2006.

DOI: Die Urkunden Otto des II., hg. v. Theodor v. Sickel, (MGH, Diplomata regum et imperatorum Germaniae, 2-1), Hannover 1888.

DOIII: Die Urkunden Otto des III., hg. v. Theodor v. Sickel, (MGH, Diplomata regum et imperatorum Germaniae, 2-2), Hannover 1893.

DHII: Die Urkunden Heinrichs II. und Arduins, hg. v. Harry Bresslau et al., (MGH, Diplomata regum et imperatorum Germaniae, 3), Hannover 1900-03.

PUU: *Papsturkunden 896-1046*, hg. v. Harald Zimmermann, 3 Bde., (Denkschriften d. Österr.

Thietmar of Merseburg (1009–1018) and The *Chronicon*
His Life and Works

MISAGAWA Akihiro

Als einen Voabdruck von meiner japanischen Übersetzung der *Chronik* von Merseburger Bischofs Thietmar (geb. 975/76, Bischofsweihe 1009, gest. 1018), die voraussichtlich im Jahre 2020/21 erscheinen wird, lege ich hiermit einen Forschungsrejumé über sein Leben und Werk. Die *Chronik* wurde niedergeschrieben zwischen 1012 und 1018, genau vor tausend Jahren, vom Merseburger Bischof Thietmar. Sie zählt, nebst Bischof Liudprands von Cremona *Antapodosis*, Widukinds von Korvei *Sachsengeschichte*, und Adalberts von Weissenburg *Fortsetzung der Chronik Reginos*, zum Hauptwerken der Historiographie aus der Zeit der ottonischen Königen und Kaisern.

Die *Chronik* umfasst in acht Büchern zeitlich fast die ganzen Ottonenzeit (919–1024), gilt vor allem als die zeitgeössische Hauptquelle für Untersuchung zur Politik, Verfassung, Gesellschaft und Mentalität der späten Ottonenzeit unter Otto III. (983–1002, Buch IV) und Heinrich II. (1002–1024, Buch V–VIII). In diesem Forschungsbericht habe ich vor allem die folgenden fünf Problemekreise zur Diskussion gestellt. I: Thietmars Leben, II: Entstehungsprozess und Überlieferungsgeschichte der *Chronik*, III: Hauptquellen der *Chronik*, IV: Struktur und Themen der *Chronik*, sowie V: die *Chronik* als Geschichtsquellen. In der letztgenannten Abschnitt habe ich mich speziell mit den zwei diesbezüglichen Problemen beschäftigt, nämlich 1: Thietmars *Chronik* im Kontext der deutschen Ostforschung um die Zwischenkriegszeit und NS-Zeit, 2: Fälschungsverdacht im Bemühen um die Wiederherstellung des Bistums Merseburg.